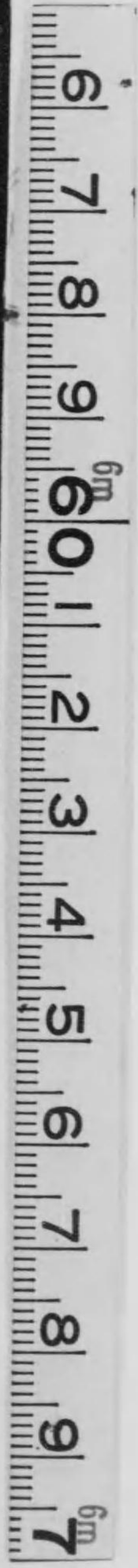


31  
775



始



31-775



邪神

文學士 和田徹城著



緒言

迷信を迷信と知らずしてこれに没頭し、貴重な生命の幾分をそのために浪費してゐる人は實に不幸の人と云はなければならぬ。迷信は一見迷つてゐる本人の損失のみに留まるやうではあるが、その害毒は實に意外の邊に及び、惑信迷信の盛衰は、國民生活の消長に偉大な關係をもつたものである。幸に本書の讀者諸君が著者の微力に御助力を賜はつて、現在の社會から一切の迷信を除去することに心を向けて戴けば、これに越す歡は無いと思ひます。

書中に集めたものは、虚構の神や、出處の疑はしいもので

あり、多くは秘密と云ふ都合の良い口實のもとに傳承せられたため、今日ではこれを根本的に考へ究めることが困難なものとなつた。そのために、このうちには著者が無知な結論に達してゐる點もあることゝ思ひますから、讀者諸君のうちで、適當な御意見をお持ちの方は、御面倒ながら、著者まで御教示下さらば有難い幸に存じます。

本書の挿圖中、二個のリングは恩師高楠教授御所藏の實物を撮影したもの、不忍池畔のリングの寫眞は文學博士加藤玄智先生から拜借したものであります。茲に兩先生の御厚意に對して深く御禮を申します。又この小著に就て、畏友文學士赤松秀景君、同寺澤智了君、蓮澤淨淳君等諸兄の

御助言又は御助力を戴いたことを感謝致します。

大正七年八月九日

於故郷

著者識

目次

序說	1
聖天	41
✓ 稻荷	71
✓ 大黒天	107
✓ 鬼子母神	133
辯才天	163
毘沙門天	182
✓ 金毘羅	198
庚申、荒神、竈神	222
摩利支天と妙見	231

目次

1

目次

閻魔……………二四三

帝釋天 附第六天……………二五二

道了、三尺坊、半僧坊……………二七〇

目次

淫祠と邪神

文學士 和田徹城 著



序説

淫祠とはその祭るべき所に非らざるを祭る謂で、禮記に淫祠福なしとある。ある説に個人が皇室の祖先である天照大神を祭ることも淫祠であるとし、神徳を穢すものであるとしたのがあるが、さうまで見ることは曲解であらう。

序説

尊敬の對象として無價値なる神を祭ること、解するが當然である。世界のあらゆる民族は、その文化の程度に相應した宗教を持てる。宗教のあつた處には、何等かの形式に於て迷信を持てるた。そのうちには感覺に起つた幻影に基づいたものや、沈思の末に成つた想像の産物もあるであらうが、一度迷信に囚はれた心は更に新しい迷信を構成して、不覺のうちに恐ろしい迷妄に沈淪するものである。迷信者の急激な墮落は、心理學的に考察したならば好箇の研究に値するものであらうと思ふ。早い話がこの頃新聞に出てゐる九星である。朝新聞を讀んでその日は自分に取て悪い日であると教へられた人は、その日の一切の行爲に就て絶えず不成功を豫期し、自己の全力を擧げて事に従事し得ない。が然し生きてゐる人間としては、何人も一日の事務を全然放擲して置くことは出来ないので、逡巡踟躕しながらも努力してゐる。心が平靜で無

い時の仕事は努力に相當した効果を收めるものでない、否、やゝもすれば失敗百出して努力に反比例した結果に至るものである。朝新聞を讀で何の氣も付かず今日は悪い日だと教へられた人は、その夜は立派な迷信者となつて、翌日は一層の注意を以て九星欄を見るであらう。そして自己の心が自己を闇愚にしてゐたことに氣が付かないのである。社會の木鐸を以て任ずる新聞紙の或るものは、知らず識らずの間にかくして迷信の傳播に努力してゐるのである。

人間の力には際限がある。人間の欲望には際限が無い。人は叶はぬ時に神頼みを始める。その多くの場合は神が人間を援けるのでなくて、援けられてゐると思ふ心に自ら援けられてゐるのである。生活が困難になればなる程、人々は現實の利益に飢ゑ、群集に誘はれて迷信に走り淫祠を祭る。世の中には或る心的作用によつて病氣の快癒したことを直ちに神の功に歸して迷信を喰ふ者があ

れば、一方には神異に託して奇怪な事を構へ、以て口腹の糧とする行者もある。かくして日本に天理教が起ると西洋にはクリスチャン・サイエンスが勃興した。無知な人々の利己心や恐怖心に乘じて、悪者が故意に又は不知の間に出した迷信が、如何ばかり人生の進歩を阻害し且つ現に阻害しつゝあることであらう。

佛教渡來の始め、會ま悪疫が流行したと云つて、これを佛教の罪とし、敏達天皇の十四年物部守屋は佛殿を焼き佛像を捨てたが、當時の人心にはこの行爲が何等の矛盾をも呼起さなかつた。又皇極天皇の三年、東國不盡河の邊で大生部多と云ふ者が橘や曼椒の樹に附く芋蟲を祭つて常世の神と稱し、この蟲を祭る者は富貴長壽を得ると云ひ、巫祝の徒がこれに雷同して、常世の神を祭れば貧乏人は金持になり、老人は直ちに若かへると云ひ振らしたので、愚民等は

家にある財寶を捨て、酒や野菜や家畜等を路傍に陳べて、ひたすら新しい福の來るのを待ち、或者は常世の蟲を取て來て家中を清めて祭禮を行ひ、野中に寄集つて歌ひ舞つて業務を顧みなかつたので、秦河勝が大生部多を捕へて、民を惑はす者としてこれを刑に處し、巫祝等を懲して妖祀を禁じたこともあつた。

この頃の人は怨靈のやうなもの、あることを信じて居て、齋明天皇が土佐の朝倉の宮で崩御になる時、鬼がこれを見て居たと云ひ、扶桑略記にはこれを蘇我入鹿の怨靈だと云つてゐる。又天變地異等にはそれぞれにその神があるやうに考へて居て、雷神を捕へる話などは、常陸風土記にも靈異記にも出てゐる。

一般人民は未開ではあつたが、まだ幾分か昔の堅固な思想が残つてゐて、未だ佛教の運命觀や宿命説に囚はれなかつた頃の話として、日本紀に面白い話がある。それは垂仁天皇の朝に宇治河が氾濫して堤が決潰した時、人々は種々に



骨折つて、その修覆に勉めたが、幾度も失敗した末、遂に二人の男を河神に供へてその怒を鎮めることになつた。すると一人の男は泣く泣く水に沈み死んだが、一人の男は手に持たした瓢箪を水中に投げ入れて、この瓢箪を沈め得ぬ神ならば邪神に相違ない。この瓢箪を沈め得るほどの神ならば、喜んで犠牲にもなるが、邪神の犠牲になることは出来ないと云つて、遂に生命を助かつたと云ふ話である。人々が常にこの男程の覺悟と確信とを持って居たならば、さのみ迷信の流行する餘地も無かつたであらうものを。

降つて奈良朝に入つては、日本の思想界は全然佛教化せられ、行基等の高僧は地方に於て極力人心の化導に勉め、或は生活状態の改善を謀り、交通の便を考へ、隨所に講社を結んで知識と稱し、隨時知識を催して田野を拓き沼澤を埋む等、今日の佛教徒が僅にキリスト教徒殊に救世軍の事業を見て眞似かけ

たことを千數百年前に立派に組織立つた方法によつて實行してゐると、一方朝廷には代々佛教の大保護者があり、中にも聖武天皇の如きは諸國に國分寺を置き、國帑を盡して都に東大寺を建立し給ひ、日本國を擧げて佛の國土・極樂淨土たらしめんとする理想を御企てになり、極力高僧を優待して民心の開発に力を御傾けになつた。

斯の如き事情にもかゝらず、王城を離れた遠隔の地方へ行くと、寺院と名の付く僧房だけが建て居て、住僧の居ない寺があつたり、住僧は居ても氣の荒い邊地の悪人のために、寺領は横領せられて維持に困る者や、破戒無慚な振舞をして人心の教化處が反對に悪い風俗を助長する者がその多きを占めてゐる程である。

上は天皇より初め下は幾多の高僧が心を一にして、日本の國土を以て理想の

佛法國となさうとした事業も、このやうな僧侶に理解の出来やう筈が無い。奈良朝と云へば學匠とか徳者とか呼ばれる僧が頻々として輩出した時代であり、皇室の威光は最も麗はしく臣民と接觸しながら輝き渡り、天子皇后は手づから施樂院療病院の事業に御熱心遊ばした時であつた。天武天皇は戸毎に佛壇を構へ、佛像經文を備へて朝夕禮拜供養せよと令し給ひ、持統天皇は百億諸臣は必ず佛を奉ぜよと訓へ給ひ、聖武天皇は自ら金字の金光明最勝王經と妙法蓮華經とを各十部御書寫遊ばして、これ依つて行爲信仰の依準とすることを御勸めになつたにもかゝらず、百姓は矢張り神怪を信じて淫祠に仕へる風を捨てなかつた。否、當時外國との交通の開けるに随つて、支那朝鮮からはこれ等闇味の人心を喜ばしめ迷はすべき種々の惡風習が移入して、一層日本人の實直な心を毒したのであつた。

この頃の民衆は識者の訓導に耳を傾けないで、印符呪詛禁厭等を信奉し、幻術妖魔の説話を喜び聞いた。ために無理想無節操な説教者は自然民衆の歡心を得るやうな奇怪な因縁話を虚構して法談の料としたから、民衆と奸僧の兩者は互に相助けて益々迷信の闇黒界に沈み、一方巫祝の徒がこの間に乘じて民衆を欺くに占筮巫術等を以てしたのである。現に聖武天皇の天平二年に安藝周防に於て、禍福を妄説し死魂を祠つた者を誡めた詔を御下しになつてゐるに見ても、彼等愚民等の如何に目に餘る程の無知な行爲があつたかを知るに足ると思ふ。

平安朝になつてからの淫祠迷信は、佛教と道教との分子を混入して一層複雑な形式を執り、社會の上流をさへも風靡して世を賊するに至つた。その最も害毒を齎したものは陰陽道である。

この時代の人々は可なり深く運命觀に囚はれてゐた。社會の事情は次第に階級的に傾いて、朝廷に參集して政治に參與し得る者は藤原氏に限られ、武門の家はその下に屬して禁廷の守護と邊國の守備に任じ、庶民は守護國司を通じて皇室の恩惠を知るに留つた。一般臣民は頭から學問の無い者、無風流なものと考えられ、邊地に住む者は夷狄視されて、全く人種の異つた者のやうな待遇をうけた。この僻見を持た者とこの偏頗な待遇をうけてゐたものに、自覺とか主義主張とかの無いのは當然である。彼等は自我の觀念に乏しく、獨立心を傷けられてゐた。彼等は可なり深く運命觀に支配されてゐた。この時に乘じて新に傳はつて來た陰陽道は頗る世人の心を脅かしたのである。

日月星辰の妖、地水火風の變は、盡く人間の特別の人若しくは一般の人々の運命に、一定の關係を有すと見、出産嫁娶元服喪儀を初め、日常の一舉一動に

至るまでがある運命に規定されたものとして、一々陰陽師に託して日時吉凶を判じ、もし知らずしてその規定を犯し、又は未來の災厄を豫知した者は、專心祈禱禳祓に熱心したのである。

陰陽道と云ふのは支那在來の道教の惡說で、年に就ては干支を繰つて吉凶を説き、甲子、辛酉の歳を革命革命の年と云ひ、朝家ではこの年に改元をして厄を禳ひ、大歳・害氣・大陰の三神の合つた年を三合厄と稱へて必ず災害があると云ひ、當梁の年は營作を慎めなどと教へるのである。

陰陽道に似たもので宿曜說と云ふのがある。二十八宿と九曜の運行から考へて人の運を判断すること、人々は北斗七星のうちのある星を守護神とし、子年の人は貪狼星、丑亥の人は巨門星、寅戌の人は祿存星、卯酉の人は文曲星、辰申の人は廉貞星、巳未の人は武曲星、午の人は破軍星を祀り、歳によつて九

曜を定め、生年の十二支に各縁佛を定め、九曜にも亦佛を配當して、人々は縁佛を供養し、その年の守護佛を祭れば福があると云ふのである。

又人の運命を判断するに曆法と云ふものがある。何の歳生れの者は厄に當つて居るとか、何の日は吉日又は凶日であると知る法で、何か事をする前に必ず曆を繰つてその吉凶を考へるのである。例へば日に凶會日、歸忌日、坎日、十死一生、道虛日、下食日、百鬼夜行日等があつて、道虛日は毎月六、十二、十八、廿四の日で、眞の日は出行、嫁娶、移徙、加冠、著袴等を忌み、百鬼夜行日は正月の子、二月の午、三月の巳、四月の戌、五月の未、六月の辰等の日である。この日は夜中外出しないと教へ、下食日には天狗星の精が下界へ來て食を求むる日と云ひ、この日沐浴すれば、この精に頭を舐られて、髪が脱落ると云ひ傳へたのである。これ等の規定は非常に繁雜周到なもので、他行、祝事、宅神を

祭ること、産婦の著帯、胞衣の埋め方、著衣、剃髮等まで一定の吉凶日があり、天火、天觸、龍口等の日は土木造作を忌み、天季日には移轉を、卯日、八風日には乗船を禁じ、五離日には嫁娶を止めた。

これに就て宇治拾遺に面白い話がある。或るなま女房が、若い僧に頼んで假字曆を書いて貰つた。初めの方は忠實に書いてあつたが、末になる程面倒になつたものか、物を食はぬ日だとか、物を食ふ日など、出放題を書いてあつた。女房も、變なことだとは思ひながら、書いてあるまゝを守つて、日を送つて居ると、更に末の方に、尿すべからすと云ふ日があつた。女房はこれも眞面目になつて守つて居たが、やがて凶會日が長く續くやうに、例の尿すべからすが、のべつに書いてあつた。女房も二三日は我慢したが、大かた堪ふべきやうもなければ、左右の手にてしりをかゝへて、いかにせんいかにせんと、よぢりすぢりす

る程に、物も覚えすしてありけるとか」とある。馬鹿けた話ではあるが、當時の有様の一斑を窺ひ知るに足るものである。

かくの如き繁雜を極めた迷信は、比較的優長な平安朝時代でこそ人も行つてゐるが、乗船乗車の厄日などを信じた日には、今日の交通機關はどんな状態であらうと思ふと笑止なやうである。一刻を争ふ危急の病人に對する治療の手段をさへも、先づ曆法によつてこれを考へて處置したに至つてはその弊の最も甚だしきものであらう。

この頃の人々は、上は皇室から下は下賤の庶民に至るまでが、物忌とか方違へなど稱することを行つた。

物忌とは普通にもものいみと云ひ、多分方位や怨靈などの凶事を意味し、その日は一日謹慎して居ると云ふのが、後には道教佛敎の思想と結びついてこれを漢音でモツキと讀み、遂には鬼の名としたものである。壺囊鈔四に、昔迦毘羅衛國內に桃の林があつて、その樹の下に物忌と名くる大鬼王が住でゐた。他の小さい鬼共はその大鬼王の威光を恐れて敢てこの林に近寄る者も無かつた。大鬼王は或時誓を起して、人の住宅に物怪が現はれたり、人が惡夢に襲はれて凶害を受けた場合には、その日大鬼王の名を書いて門に立て、置けば、妖魔鬼神はその名に恐れてその家又はその人に近寄り得ないやうにすると教へた。故に物忌に當つた人の門の前に物忌と書いた札を出して置くのであると當時の傳説に依て説明してある。

多分平安朝時代ものいみをモツキと讀んで居たこともあらうが、壺囊鈔は足利時代の著であるから、この説明は當時行はれてゐた道教の鬼門説などから得た附會説を擧げたまでで、平安朝に通じてこのまゝの説が行はれてゐたか否

かは不明である。然し平安朝の人々が物忌の日に物忌と書いた札を門の前に出して居たことは事實である。

壺囊鈔に桃の林云々とあるが、印度には桃の木は無い。桃を以て不思議な力のあるとした思想は支那の道教思想である。佛教の經文のあるものに魔を拂ふのに桃の板を云々せよなどであるのは、印度以外の地方から得た説と見るを得、古事記の神代の卷に、伊弉諾尊が夜見の國黃泉比良坂で、女神伊弉冉尊の類の鬼女に追はれて、桃を投げてこれを防いだと云ふのも、多分支那の思想の混入であらうと思はれる。

物忌の日は如何にして勘定したかは不明であるが、何か一寸したことゝに氣を病んで陰陽師の處へ相談に行くと、陰陽師はその出来事やその人の年齢によつて何月幾日に物忌をせよと云ふ。物忌を勧められた者は眞面目になつてそれを

守つて、軽い物忌には衣類又は頭の髪に物忌と書いた小さい札をつけ、そのままで外出もし朝廷へ行くこともあつたやうであるが、重いになると一日中門を閉ぢて訪問客を入れぬのみか、自分の姿を見られ聲を聞かれることをさへも忌み避けたのである。茂助と云ふ男は物忌の日に遣戸から顔を出したのみで陰陽師の呪詛に當つて殺されたと傳へてゐる。

ある時紀の長谷雄が自分の屋敷に犬が出入するので、陰陽師に見て貰ふと、何月何日に物忌をせよと云はれたが、長谷雄はそれを忘れてしまつて居ると、その日押入れから頭に角のある四本足の鬼が出た。よく見ると犬が桶を冠つて仁和寺の稚子のやうな格好になつて困つてゐるのであつた。これに就て今昔物語には當時の人々は陰陽師が何日に鬼が出る。然し人を害せぬ鬼だと豫言したことを、よくも云ひ當てたと稱讃し、長谷雄がその日物忌を忘れてゐた怠慢を

譏つたと書いてゐる。紀長谷雄と云へば名を知られた學者である。その人にして犬が住邸へ來たと云つて除陽師に相談を懸けるのも、既に幾分當時の迷信に囚はれてゐる傾があるが、物忌を怠慢にしたと毀つた當時の人に至つては愚の頂上である。

方違へと云ふのはある處へ行かうとする時、その方位が天遊行の方に當つた時一度吉い方角の家へ行て一泊し、翌日になつてもと志した處へ行くこともあり、又干支の配合で自己の住處の方角が塞がりになる場合、一時居宅を移り住み、その開くの待つて再び舊の住處へ歸る法もある。今の書生の移轉のやうに、行李一つに机一脚の身軽さならば何の面倒もあるまいが、何々院と申す上皇が時々方違の行幸を仰出され、日常の御調度を運ぶやら、百官が衣冠を正してこれに供奉するに至ては、その繁忙は大變であつた。又當時は病氣が永引い

た時その病因を方角の悪いことに歸して、安靜を要する病人を他へ移すこともあつた。此等を以て見るも方角の迷信が如何に當時の人々には重要なことに考へられてゐたか、解る次第である。

平安朝の人心を最も深く支配してゐたのは法華經と觀音の信仰とであるが、その教を往生の縁とし、眞の佛教の人生觀に立て佛に歸依する者は全體から見れば非常に希なもので、或は神佛の現報現罰を説き、天狗、鬼等に關する妖談を傳へ、犬・猿・野猪・狐・蛇・蜈蚣等の靈異を説いたが、然しこの時代はまだこれ等の動物を崇拜の對象とはしなかつた。

崇拜の對象としては、在來の神社又は觀音・彌陀・地藏等の諸菩薩は別として、正體の知れない變なものもあつた。例へばこの時代の初めに漢神と稱する人に崇をする神に、牛を殺して供養するものがあり、白河天皇の頃福徳神、長

壽神等を祭つたこともある。又密教は支那から種々の神を傳へて在俗の僥倖心に投じ、僧侶は日本固有の神の本地を説いた。

傳教や弘法が本地垂跡を説き、神道の神と佛教の佛との渾一を稱へたとは、佛教の理想から云へば當然のことではあるが、その末流の者に到つてこれを極端に牽強して、或は傳教の名を借り、或は弘法の名を盗んで勝手な眞似を初めたので、この時代の初中期にはまださのみ害毒を流してはるなかつたやうであつた。

鎌倉時代から室町時代にかけては有名な天變地妖のあつた時である。その度に人々の心にしみじみと感ぜしめられることは、宇宙の不可思議と人生の無常とであつた。

今まで朝廷に仕へて安寧な日を送つて居た識者即ち公卿の勢力は衰へて今迄

下人であると思つて居たものが天下の政を左右するやうになつた。そしてこれを昔に返さうと謀つた事は幾度か失敗して、勿體なくも主上を廢流し奉つた者さへあつた、日本の出來事としては前代末聞永劫に絶後であるべき悲しむべき事件である。鎌倉時代の武士はまだ幾分か道徳を知つてゐた。室町時代に至つては所謂武士道は何處にあつたであらう。

忠孝仁義を以て生命とし、名を重んずる武家の氣風は廢れて、時代を支配するものは飽くを知らざる功名心利己心のみであつた。野心の多い家來は悪心者を糾合して君主を殺し、忽ち自立して所領を私した。世人はそれを又不道徳とも思つては居なかつた。權力から離れた武士は、都と云はず地方と云はず、到處に切取強盜を働いた。恒産は此の時代には却て命を墮す縁となつたのである。偶々賊手に財産を奪はれないで居た者は徳政の布告がこれを脅かした。



今日の日一生懸命に働いて得た正當な報酬も翌日は誰れの手で強奪せらるゝやら。しかも不忠不義の者が榮華の日を送つてゐるではないか。人々は道德の權威を疑つた。

この腐敗した時代に於て人々の取り得る道は二つあつた。念佛の法門に走つて來世の極樂往生を願ひ、安養界に至つて自由の身となることゝ、現在主義に執着し、如何なる手段をも講じて、些しも多く現在の世界に快樂を漁らうとすることゝである。

現世の快樂を享けようとする者は手段を選ばず道德を無視して奮闘しなければならぬが、弱少の者のよく成功する所では無い。弱者は自然神佛に祈つて現世利益を乞はなければならなかつた。こゝに於て人は一時の僥倖を得るために賭事に熱中し、淫祠を祭つて幸福を願つた。僧侶のある者はこの間に乘じて

經軌を偽作し、魔神淫祠を捏造して世人を毒した。

この時代に於て最も無意味な、最も無分別な、しかも人の心に最大の不安を與へたものは應仁の亂であつた。過去遠々の惡業を消滅し、未來永々の安樂を與へ給ふ無窮の救濟者と思つてゐた佛は毀られた。經文は寺と共に焼かれた。如來の代官であるべき僧侶は兵仗を帶して無意義なる殺生を敢てし、佛の戒律を破つて自ら恃む所ある如く振舞つた。しかもその起原はと云へば二三の者の利欲の鬭争でないか、念佛の法門と禪宗とが榮えたのはこれ等の事情に迷つて識者がこれに赴いたからである。多數の人々はこの不可思議な世の轉變に際して更にその迷夢を深くした。

人魂、怨靈、狐狸、變化、光り物等の怪は口から口へと傳へられ、虛妄なる神佛の靈驗を信じ、天狗を畏れてこれを敬ひ、狐を稻荷とし、蛇を有賀神とし

て福を祈るやうになつたのは此の時代からである。長祿の頃には關東のある河に、貌は婦女、體軀は鯉魚、足は鳥の怪物が居たとて、その圖を都まで持て來ると、一方都の眞中では倉の中に腰から下が蛇の夫婦が住でると喧傳して來たと云ふ話である。

時代の風潮が既にこの通りである。眞言に立川流の邪法が興り、巫祝と僧侶とが提携して愚民を迷はし、祈禱の報酬を得るに専心した如きは當然の產物である。

徳川時代は佛教の全盛期であつた。けそれだけ腐敗した分子も多かつた。佛教はキリスト教に對する政策上、一面に政治組織と結び付いた。僧侶は戶籍官吏の役を勤め、益の讀經又は報恩講を修しない者は異教徒であるかの如く取扱はれて、官に訴へられることさへあり、檀那寺を取換ることに一定の規定があつた。

あつて、非常に困難であつたから、自然と檀徒は一定の寺院の財産であるかの如き觀を呈し、僧侶はその檀徒によつて衣食して布教傳道に熱心しなかつた。時たま説教があれば、それは寺院の收入を増すことを期待した仕事で、寄席藝人のやうに美音を賣物にして因縁談の段物をやるとか、年回法要を多くするために地獄の繪説をする者を好んで招聘し、出離生死の問題、宗旨の第一義諦の説法はたゞ宗派の學寮でのみ聞き得る位のものであつた。

佛教の精神の墮落した一例として最も顯著なことは、前の時代(鎌倉)に出た佛教の異説は革進的建設的の異説であつた。念佛門も法華宗もそれであつた。がこの時代の異説は腐敗した惡説である。日蓮宗の不受不施派は頑物の陋説であり、念佛門に起きた御藏門徒は狂人の僻語に過ぎなかつた。その最も甚だしきに至つては一時大和のある寺で、奸僧等が相謀つて、佛經轉讀の間に往生す

る奇特があると云つて、生きながら人を棺に入れ、その底から鎗で突殺し、直ちに火葬に付して罪跡を暗まし、又天明の頃、上總の一宮で蓮華往生と云ふことを始め、本尊の前の蓮華の中に坐らせて置いて、太鼓を打ち、題目を稱へて大騒ぎをしてゐるうちに、熱鐵を臀部にあて、これを殺し、愚民を惑はして金銀を賺し取つたことさへあつた。實に言語に絶した悪行と云ふべきである。

法律は可なり嚴重に僧侶の行爲を監視して居たが、如何んせん彼等はあまりに安佚であつた。彼等のある者は公然美少年を蓄へて不倫の遂欲に耽つた。酒も飲めば肉も食つた。内密にだいいくを置く者もあつた。寺格が低いか、収入の少ない僧侶はこれを見て羨望の結果、黄金を貯へて高位を買ひ、色の變つた衣を著ることに熱中した。當事者に贈賄して妥協的に受驗し、冥加金を納めて僧の位を買ふのである。葬儀に等級をつけ、勸化、奉加、頼母子講、積金講、

富突などを始めたのは皆、私欲を満たすための金を得る手段であつた。

人々の心は奸僧に誘はれて知らず識らずその好餌となつた。寺院の境内には辨天・稻荷・聖天・大黒等を祭り、迷信と惑信とは益盛になつた。獨り眞宗のみはこのうちに在て一切の雜行雜修を排斥し、彌陀一佛に歸依してその他の神佛を祭ることを非難したが、僥倖を願ひ現世の安佚を望む人間の弱點は、識者が口を極めて教へた幾多の説法も遂にこれを如何ともするなく、淫祠は全國に散在するに到つたのである。

奸僧や神官が外道の神や空想の神を作り出して、手段を盡してその神の功德を吹張すると、此處でも彼處でも敗けぬ氣になつてこれに習つたものであらう。火難と云へば天狗の變化の三尺坊、長命を願ふには近江の多賀神社、祈雨と云へば伊勢の多度一目龍、縁結びには出雲の大社と云つた風に、何でもかでも神

棚にその護符を祭り込んで、富山の藥屋の紙袋から風邪には實母散、腹痛には熊膽丸を出すやうに、時に應じて神棚の八百萬の神にそれぞれ得手勝手な願をすると思ふと、今度は神佛に眼疾地藏、とけぬき地藏、乳離藥師、目赤不動などと種々勝手な名をつけ、目赤と目明かすと結付けて、失せ物を探ねる時の神としたなどは、寧ろ噴飯に類するものである。川柳子をして「目の色をかへて不動は名を廣め」と罵らしめたのは奸僧の重罪と云ふべきである。

世の識者が底止する所なきこの惡風の改善を計畫したことは一再に止まらなかつた。眞宗の信者は、「雜行雜修自力の心をふりすて」の誠めを眞額にして自衛した。備前の名君新太郎少將は領内の淫祠を毀ち、水戸の藩では領内の淫祠三千八十八を廢した。草茅危言には「王室の衰へより巫祝家の説追々盛になり、様々の淫祠天下に満ちたり。(中略) 出雲大社の龍燈、備中吉備津の宮の釜

鳴など、鬼神の威令に託して巫覡輩の愚民を欺き、錢を求むる術とす。其外讃岐の金毘羅、大和の大峰など、種々の靈怪を唱へ、又は稻荷、不動、地藏を祀り、吉凶を問ひ、病を祈り、因て醫者方角をさし示し、或は醫藥をやめて死に致らしめ、蛭子大黒を祀て強欲姦利の根據とし、天満宮を淫奔の媒とし、觀音を産婆の代りとし、狐狸の妄談、天狗の虚誕、聊の辻神辻佛に種々の靈驗を獵に云ひ觸らし、佛神の夢想に託して妄藥粗劑を賣弘め、男女の相性、人相、劍相、家相の類、邪說横流し、愚民を眩惑矯誣する術に非ざるはなし。斯る怪妄、世界頑鈍にして風俗誠に歎かはし。憫むべきの甚しき者なり」と誠めてゐる。

淫祀論には「ともかく諸國に淫祀夥しく相成しは往古にては最澄空海の邪謀より始まり、今の世にては兼俱兼右の奸計より起り申候」とあるが、最澄空海の罪と云ふは不當である。これは先にも云つた如く奸邪の僧が最澄空海の名を

借りて虚妄を流布したまでである。

靈神道にも新作の怪しげな神社が俗信や權勢の被護によつて堂々たる神社となつたものもあつた。江戸業平天神は業平と云ふ剛力の男の墓に小祠を建てたのが在五中將の祠と稱せられ、小六明神は小六と云ふ馬丁を祭り、根津權現は根津右衛門が刑に逢つて祟をしたと云ふので建てた社が、今では大山祇とか何とか云ふ神を祭つた社になつた。かくの如きものうちには神官の惡計に出たものも間々あつて、例へば先に云つた雨乞の神、多度の一目龍は、神宮寺の神官が神通第一の目蓮が龍を使役して雨を降らせることから思ひ付て、一目龍と云ふ名を作り、桑名の香具師の元締と結託して、諸國に散在する香具師をして雨乞の靈驗を吹張させ、その報酬として香具師の元締の家からは祈禱に使用する供物を買はせることにした。この香具師の家は井口屋と云つて兩者の關係は

今も尚ほ持續し、假令他人が供物を納める場合でも、必ず井口屋の遺族に利得の割前を出してその許可を得ることになつて居る。可笑しいことには大正二年の旱魃の時、神社の後にある瀧の水も涸れ、田は乾き破れても雨は降らなかつた。里人はこれを見て、一目龍が祈禱者に水を分與するために瀧の水も涸れたのだと云つて居た。

これに反して正祠が淫祠の色彩を帯びて來たものもあつた、もと京の出雲路に幸神があつた。リングアの神であるから、自然その職掌は男女關係にあり、縁結びの神であつたのが、出雲路を出雲に通はせて、何時の間にか出雲の大社を縁結の神と云ひ振らし、大國主の尊の子孫が縁結の護符を出すやうになつたなどは最も著しい事實である。

かくの如きは實に神官僧侶の不見識から來たもので、何かあると二つ目には

必ず社寺の由緒を擔ぎ出し、俗流に媚ひてその歡心を得んとして、人目を引く水商業の者の參詣を多くするために、開帳・遷宮には藝妓俳優を頼んでその名を染めた幕を寄進せしめ、或はその式に列せしめて、江戸へ来て役者を頼む神ほとけ」とまでに墮落せしめた風潮が然らしめたものである。

當時崇拜された動物には老狐を稻荷とし、白蛇を辨財天とし、歳を歴た熊、猿、鶯、鯉、鰻、鼈、蛇等を山川沼澤の主と云ひ、又神の使者としては鳩の八幡、猿の山王、蛇の辯天、鼠の大黒、狐の稻荷、蜈蚣の毘沙門、蟻の天照大神、鹿の春日明神の如きものあり。廣益俗説辨の著者は「神明鳥となり蟲となりてあらはれ給ふ事非なり。神社にまうで、己が情慾をとけんことをのべて、ねがひのごとくなし給はゞ燈明を奉らん、繪馬を掛けんなどのるたぐひあり。若人ありてこれらの祈にくみする神もありといはゞ淫祠にして邪神なるべし」

と云つてゐる。鳥獸を神とする妄は今日ではあまり行はれなくなつたが、當時世を擧げて迷信に走つて居た時の論と思へば可なり思切つた論旨と見られたかも知れぬ。

植物の崇拜には、乳貫ひ榎、板橋の縁切り榎等を初め、鬼子母神の境内にある銀杏に抱付くと子を授かると云ひ、又その樹の幹の朽ちた穴をヨニーに比して注連繩を張り、或は種々の變種に因縁話を附會して愚民を欺き、逆さ竹、片葉葎、不斷櫻、不實梅、終松、三度栗等枚舉に違ない程である。

禁厭等も大に複雑になつた。或は家相を考へ、或は方角を見、歳徳神と稱して娑喝羅龍王の女、牛頭天王の妻、婆利塞女など、稱して一年の守神とし、又賭事・病氣等に多く新奇な風が流行して、墓石の建て、まだ雨に逢はないものの破片を持てゐると賭博に勝つと云ひ、江戸では八百屋お七の墓石、鼠小僧の

墓石を毀き、大坂では難波新地の三勝の墓石を癆咳の藥とし、乞食女お六の墓石を禁酒の禁厭とした。

明治から今日に及ぶまでには我國の思想界は歐洲の科學的思想と自由思想とによつて大なる變化を來たした。徳川時代の奴隸的道德は廢つて國民を支配してゐた意氣地の無い運命觀とあきらめ主義とは餘程影が薄くなつた。亂世の無常轉變と壓制の沒義道に泣くことは更に無くなつた。然かも人は迷信に囚はれ淫祠を拜する者が跡を納めないのは何の現象であらう。

明治維新以後國民は專政を免かれて、三十年間程は新知識の攝取に急がはしく、新に教へられた個人の權利を使用することに夢中になつてゐた。一切の社會の階級を除かれた人々は、各自全力を擧げて自己の欲する所のものを擧まらうと努力した。國民が自我の念に驅られ、極力利己心を増長せしめた時、其所

にも亦幾多の障害のあることに氣が付いた。比較的知識階級に在るものは在來の淫祠を拜する程の屈辱をも敢てし得ず、正しき佛陀の教を聞いて自己の安心に到達するにはあまりにいらくと迷つてゐた。此の時に當つて日本の思想界には自ら豫言者を以て任ずる者や、無我愛を稱へるものが現はれて一時世人の好奇心を唆つた。豫言者はまだ生きてゐるが何を豫言したのか不幸にして知る人も無い。

爾來或は千里眼と稱して隠蔽した物體を云ひ當てる者、念寫と稱して一種の曲藝を行ふ者が現はれると、一方には自ら神を以て任じ、巫女口よせに類する事を行ひ、たまたま信者を迷はして不思議な幻惑を生ぜしめて奇跡を見せると云ふ者、或は病氣を癒すと云振らす者が主都に喧傳せられると、山陰の避地には神に託して雲を攔むやうな豫言をなし、信者はその豫言の内容を現在の社會

の事件に牽強附會して有難がるものも現はれた。或は大靈道と云ひ、大本教と稱し、巢鴨の御殿、隠田の行者、池袋の神様を初め、幾多無名の修法者行者が簇出したのである。

斯の如き産物は、大正の世に於ける不自然極まる存在の如く思はれるが、現代の我國の思想界の事情を考察し、その依て來る所以のものを尋ねれば、これもまた現代の社會が作つた自然の半面であることを首肯しなければならぬのである。

明治の中葉からかけて我國はあまりに物質的にのみ生きようと努力した。曩に賜はつた戊申の詔書はやゝもすれば物質萬能の弊に墮ちんとする國民を自覺めしめんとした先帝の大御心の現はれと拜せられるのである。

申すも恐れ多い事ではあるが、國民のあるものは、陛下のこの大御心に叶ひ

奉るべく、あまりに利己的で物質的であつた。あまりに無知で無自覺であつた。勿論國民を驅て物質欲の奈落に陥れたものは外國の財政的優勢にもあつたであらうが、國民に理想が無かつたことは最大の原因をなしたのである。

彼等が絶えず夢みてゐるものは金權であつた。無理なる社會は今や國民の全部を誘つて黄金萬能の渦中に没入せしめやうとした。或者は苦勞して蓄へた些少の資本を以て一擧して巨利を博すために投機に熱中した。或者は泡沫會社の設立者に欺かれて私財を蕩盡した。黄金を得るに手段なきものは、敢て罪を犯すをも辭しなかつた。職分に安んずること、職に忠實なることは彼等の眼には因循姑息の惡徳であつた。

進取主義、奮闘主義、それは大に歡迎すべきことであるが、自己の自分を忘れた進取主義と奮闘主義とは、やがて自滅の基である。現代の多數の人々は無



理想の猪突主義でなければ、非望を藏した陰險な悪魔主義である。教養なき人は物質上の欲望に飢ゑて爪を磨ぎ牙を鳴らして咆哮してゐるのである。

斯の如き世相に住んで人々は多く失敗した。たまたま物質的に成功した者も過勞と放縱との結果として肉體に種々な故障を持てゐた。生存競争の激甚なことは理想と修養の無い人々をヒステリックなアブノルマルな精神状態に誘致したのである。

識者は今更らしく物質萬能の害毒に目覺めて、精神教育を盛ならしめよと叫んだ。或者は精神の偉大なる力を説き、或者は宗教と倫理の力を借るべく議を建てた。然しその時は既に物質欲は社會を風靡し、無謀なる生存競争のために生じた病的現象は人々の精神乃至は肉體のうちに瀰漫してゐた。このアブノルマルな社會を目標とし、好餌とせんとして現はれたのが先に數へた大正の新宗

教（宗教と云ひ得べくんば）である。彼等は神經衰弱に罹つた社會を相手に、或は病氣を癒すと云ひ、或は巨利を得しめると號して白晝の太陽の下に豪然と構へてゐるのである。

天理教が病氣を癒すことを賣物にして幾多の信者の財産を蕩盡せしめた故智に習つて、彼等は各自おみき婆さんたらんとしてゐるのである。最近池袋の神様が獄に投ぜられたのを見、一時目白の高臺に名を賣つた阿訶婆羅縛が田中伯の失墜と前後して消えて無くなつてしまつた謎を思ひ合はせたならば、如何に迷うてゐる人々とても幾分は夢も覺めるであらう。

在來の淫祠はなほ信者の心を繼いでゐることは不思議もないことである。淺草本願寺の境内に五行を考へて開運の道を教へると云ふ男が麗々しく看板を擧げてゐて、前を通る人が誰あつて不思議にも思はぬ世の中となつたのである。

何處へ何が巢を構へて何を初めるやら知れたもので無い。

國民の向上を願ふ上に於て吾人は極力迷信を排し、淫祠を却けなければならぬと共に、古來各時代を通じて一世の燈明となつて國民の開發に任じた賢明な人々に感謝しなければならぬ。

# 聖天

一

聖天又は天尊様と呼ぶのは俗稱で、具には大聖歡喜天、略して大聖天、歡喜天とも云ひ、梵名は毘那耶迦(Vinayaka)又は識那鉢底(Ganapati)と云ふ。使呪法などに種々の漢譯梵語が出てゐるが、要するに二者の轉化と見て差支なからうと思はれる。毘那耶迦は古來障礙神又は象鼻と譯し、識那鉢底は歡喜天と譯すと傳へてゐるが、後者は軍(gana)主(pati)の意味である。一説には識那鉢底が神の本名で、象鼻形の毘那耶迦山に住む故に兩名があると云ふが、毘那耶迦は指揮者の意で、矢張り軍主と同意味の言葉である。象鼻はその形像から

来たものであらう。印度ではガネーシャ(Ganesha)と云ふ名が通用せられてゐる。聖天の功德として最も普通に施福と和合とが信ぜられてゐるが、和合は神の形像に對する後から附加した解釋で、施福神が重用なものである。日本の俗間では妙な考を持つてゐて、聖天を祀り、聖天に祈禱を捧けてその神體を油煮にし、その油で饅頭や團子を油揚げにして、それを寺から貰つて歸つて近處の者に分與すると、それを食つた者の福が皆自分に集るとか、聖天を祀る者は七代までの子孫の福が我身に集るとか云つてゐる。前者の強欲非道な點は論外であるが、後者は稻荷の章に出て來る茶吉尼の信仰と同じく、共に外法としての思想から來たのかも知れぬ。

斯の如き極端な信仰は、流石に經軌やその他の末書には書いて無い。使呪法に毘那耶迦自身の説として偈文が出てゐる。「我が希有微妙の法を受持する者は、種々の願望を満足し、盛名、高官を致し、財寶を得、顛狂疥癩等の病を癒し、悪者の迫害を免るゝことが出来る」と云ひ、受持者を三等に別つて、「上は帝王となり、中は帝王の師となり、下は富貴を得て僕婢野に滿ち、美女庭に滿つ」と教へてある。

このやうな福德が打てば響くやうに得られたら、聖天へ參詣する者は皆一夜にして金満家になる筈であるが、そこには又裏に拔路が作つてある。大聖歡喜天靈驗和訓圖會に「當時の祈願のみにて、生涯を遂げて信を遂ぐるは至つて稀にして、凡そ其信者といふを見るに、過半百日か又は五十日或は三七日を限りて、譬へていは、人に預け置たる物を取戻すやうに意得て祈誓立願する人多く其信者を觀るに、多くは不實師、相場師、博奕師或は女肆、遊樓將、俳優、藝者、芝居家業など、然も吾は聖天行者なりと人に見知られん計りにて、兎

にかく其行装を顯はし華美にする信者多く、是等は眞の信者とはいふべからず。畢竟は潛上行者といふものにて、奚んぞ利益を蒙るべき。(中略)適ま信心無適にして寒中水を浴び、或は斷食斷火などにて身を碎き、一心を堅固に立願の誠實にほだされ、天尊の大慈大悲より見るに忍びず、一旦の利徳願望の如く應驗を得させ玉ふことあるといへども長久を保たず、一旦の依怙に因て立願利益を得させ給ふとも、所謂善忘るれば陰忘るとかやいふごとく、其神恩を辨へ信するといふことなく、忽ち龐略に信心怠るがゆゑに、却て神罰を蒙り、困窮以前に倍して貧窮に逼る人あるは、其神恩を忘れ信心も等閑龐略にする處の現罰たり」とあるにみると、福を貰ふにも色々の條件があること、見える。

聖天参りをする者のうちに、その條件に就て一種の俗信がある。朝早く起きて毎朝参拜すること。衣類下駄等は新を好まざること、美食せざること、神を

念じて専心家業に従事すること、聖天を祈つてゐる間は夫婦の交を絶つこと、(これは聖天が嫉妬を起すからだと言ふ)大根を食はぬこと、(聖天の好物だから厭上する意味で)等である。此様ことを守られる位なら何も好んで聖天を祈らなくとも金持になられる筈であるのに、營々として神の意に反くを恐れ、これに供物を捧げ、所得の一分を割いて祈禱の費用に供して後悔しないのは、法外な僥倖を願ふ人心の弱點を暴露したものである。經軌には流石にこれに類する教條は無いが、通俗の讀者に示す靈驗記流のものには、往々にして歸趣に迷ふやうなことが教へてある。例へば利己の爲に祀る者は福を得ることが出来ぬと云ひ、智慧に應ぜざる大望を起して濡手で粟を掴み取る様などを考へるななど云ふことは、一應道理至極のやうに聞えるが、自己を犠牲にしても一切衆生を救ふと云ふ大願を有する菩薩や、自己の分を知り自己の智慧相應に行爲し

て非望を起さぬ人間が、何の必要あつて現世の小利益を求めて卑賤の惡魔に類する神に頭禮百拜を敢てし得やうか。

聖天を畏敬することはその本來の性質が惡魔であり障礙神である點から來たものであるが、俗間ではその様なこと、知らずして、「信心の輕薄麁略なりしを省り見ず、却て天尊を蔑に侮り怨み奉る」靈を誡め、「天尊を祈り奉るに（その修法を）寸毫も知らぬさへあるに、精進潔齋もせず、身を清淨にし慎むといふ事もなく、信者より浴油供などを受けて黃白を貪り取るを意とせる神罰の觀面」驗なるを畏懼してゐる。勿論行者がその身を清淨にすることは經軌にも教へた所で、金色經にも「邪淫を犯さず、虛誑の言をなさず、五辛と稱する大蒜、茗葱、慈葱等及び芸薑、胡荽を食はず、不孝の者の家及び産の穢ある室に立ち入るべからず」とあり、又、念誦供養には「聖天の像を賣買することを禁じ、

常に室房内に置いて佛殿に安置しては悪い」とある。この佛殿に安置しては悪いと云ふことは、畏懼清淨を保つ所以で無くて劣惡の魔神たる面影を示したものである。

聖天が果して群劣惡の魔神であるならば、如何なる本質の神であるかと云ふことになるが、その順序として暫く神の形像（姿）と修法とを記して次第に探索の歩を進めやう。

聖天の像には種々の形式がある。先づその最も簡單なものから順序に列記してみやう。

- (一) 二臂の像 左手に蘿蔔根、右手に歡喜團（蜜胡椒等の藥味を混じて作つた團子）を持ち（秘藏記末）象頭人身のもの。（金剛界曼陀羅大鈔）
- (二) 四臂の像 象頭人身にして右の二手に鉞斧と歡喜團とを持ち、左の二手に

に牙（或は金剛杵）と寶棒（或は三叉戟）と持つ。又右に羂索（或は金剛杵）と三叉戟（或は金剛杵）、左に金剛杵と鉞（或は金剛杵）を持つ。現今印度に行はれてゐる像はこの像に似てゐるが、多く坐像である。立像は全く無いと云つても良い。體は黄色短體、長腹で、牙が一本折れてゐる。持物は法螺や蓮華のこともあり、鼠に乗つたり鼠を使者にしてゐる。こんな邊から誰か、大黒と混同したこともある。

(三)單身六臂の像 象頭人身で、象の鼻は少しく左に曲り、一方の牙が折れてゐる。左上手に刀、中手に果物を乗せた盤、下手に輪寶、右上手に棒、中手に索、金剛杵、下手に牙を握る。金色經には左上手刀、次手歡喜團、下手劔棒、右（不記）次手金剛杵、下手索を持つとし、又像を造る法と、畫像を作る法を示してある。刻像には白檀紫檀練木を用ゐる、他物を用ふべからずとし、彩色には動物質の繪具を用ゐるすして、植物性か礦物性のものを用ゐるよと教



天聖の臂六身單  
照參頁八四

へ、畫像は白の細糸を厚めに織つた木綿地に、聖天の像を金色に畫くのである。像の周圍には一定の様式の裝飾があつて、脚は金山を踏み、頭上に五色の雲棚引き、雲の中に四天王と仙人とが居て華を降らし、左には俱摩羅將軍、右には阿吒薄元師、左下には美人が音樂を供養し、右下には牛頭、猪頭、象頭、馬頭の四夜叉が、兵仗を執り虎の皮の禪を締めて護侍してゐる様を畫く、而してその畫像を作る時は決して他人に見られてはならぬと禁じてある。

(四) 四方六臂毘那耶迦 これは雙身法に出るので、東南西北に無憂大將、嚴髻大將、頂行大將、金色迦那鉢底の四者を擧げ、蘇婆呼童子經上にも出てるが、重要でも無いから、一々持物を出す必要も無いと思ふ。

(五) 六面六臂の像 これは恐らく名のみであらう。雙身法に「經に説く如し、此法は秘すべきものなり」としてある。色々列擧しないと勿體らしく無い

めに、古人が名を出したのを、後世の者が一層悪用して、深秘の口傳にはとか何とかと云つて、勝手に虚誑を構へて妄語罪を犯して地獄の種を蒔いて行つたものだ。

(六) 雙身の像 この聖天が日本で最も普通に行はれてゐる像で、夫婦の二神が相抱擁して立ち、二神共に象頭人身に作り、男神は顔を女神の右肩につけて女神の背部が見える位にし、女神も亦その顔を男神の右肩に寄せて男神の如くにしてゐる。二神共に足と踵を出して履物を着けず、手足の格好は中肉に肥つた女のやうに白く、男神は冠を着けないで肩に赤色の袈裟を係け、女神は花環の冠を被つて袈裟を着けず、手足に瓔珞と飾の環を嵌め、その兩足で男神の足の爪先を踏み、二神共に赤色の腰巻を締め、手は互に相手の神の脊中で右を上にして重ね合ふてゐる。像の身長は七寸か五寸に作り(以上儀軌の説) 香木にて彫刻す

べきであり(念誦供養) 白鐵銅(身) 金銀で鑄ても良い(法) と云ふ。一説に女神は目を細く牙を短く作り、二神共に袈裟天冠を着けずして本體毘那耶迦身を現じてゐるとし、(含光記の第三像) 又含光記に權實を現はした像として女天は天冠を着け、鼻と牙短く、目細く、赤袈裟を着け、色白に作り、男神は忿怒を含んだ顔付で鼻長く、目大きく、天冠と袈裟を着けず、皮膚の色は赤黄色に作り、黒色の衣を頸と肩とのみに纏ふて、顔を女神の顔に押し付けて愛惜の相をしてゐる像もある。

聖天の像の種類としては上述の列擧でも知られるやうに、象頭と夫婦二神の抱擁とが特長であるが、その説明はこの神の本體を説く時に譲つて、茲で一寸その修法の様式を述べてみよう。

元來密教の修法の様式は良く云へば深遠を極め、悪く云へば紛亂を極めたも



ので、一々の擧手投足から供物の種類排列にそれぞれの哲學的解釋を加へ、その一派一派の中では整然とした繁雜な儀式があるが、一方に秘密を尊び、強いて附會したやうな説を立て、口傳と號したり、同じ相弟子の中でも、應病與藥と云つた風に、この者にはこの問題に對して斯く教へ、他の者には他を教へると云ふ風があつて、師匠の腹の中ではその邊の消息は明に知て居ても、孫弟子あたりへ來ると、師傳を唯一の信條として他を攻撃するやうなことが始まつたもので、後世の供養次第などと云ふ書物と藏經の中にある修法の様式とは幾分間隔のあるものとなつた。が根本は經軌にあるものに全然反したもので無いから、今は經軌のみによる事とする。

一般的の修法の儀式は、月の初めの一日に清潔な室内で牛糞を以て圓形の壇を築く。(印度では牛糞は最も清淨)その壇の大小は隨意で良い。壇が出来たら一升斗

りの清淨な胡麻の油を銅器に容れ、咒文を稱へてその油を清める。咒文は百八度稱へるのである。次にその油を煖めて聖天の像を油の中に入れて壇内に置き、銅製の匙又は杓にて像に油を灌ぐこと百八回に及ぶ。

この法は一日中七度即ち曉に四度、午時に三度行ひ、以後は毎日油を咒文にて清める式から繰返し七日に及び、更に功驗の見えない時は又七日、七日と重ねて行ふのである。

この修法中で最も大切な時は聖天の像に油を灌ぐ時で、その時修法者は自己又は依頼者の願望を度々敬白し念するのである。

供物としては牛乳の煮つめたものや、水を小麦粉に混じて作つた團子、蘿蔔根酒、歡喜團、新しい花や果物等を日日新しく供へれば、一切の善事意の如く成功し、災禍は悉く消滅する。聖天に供へた食物は、自分がこれを食へば氣力を増進

する徳がある。

これは雙身法と使咒法に出た修法の式である。供物を自ら食へと教へだのは、俗信の供物を食した人の福が無くなると云ふのと反對の意見であるのも面白い。密教の多數の經は、行者又は俗人が供物を食ふことを禁じてゐる、陀羅尼集經三には「供物を食へば咒力驗を失ふ、貧窮の者に布施せよ」と云ひ蘇婆呼童子經中にもそのことあり、眞俗佛事編二には瞿醯經の説として、供物を捨てることが出て居り、密部の經の中に「その道場内に日日新しき飲食を造るべし、壇場内に供養を絶たざれ。その供養の食(物を)道場に入れる人(及び)衆僧等、拜授法教主(式の指揮者)阿闍黎(導師)は並にその食を取て食ふを得ざれ、道場に入らざる人に與へて食はしめば即ち(法の成就を得)」とある。聖天の供物に關する俗信もこのやうな邊から來たものかも知れぬ。

修法を三七日又は七日間行つて功驗の無いときは結鼻頓合法と云ふ修法を行つたとある。(念誦)この法は白絲を取て大身(心)咒を百八遍誦し、百八の結節を作り、その絲を二分して聖天夫婦の鼻の端に結ぶのである。これを行つた後三日間は、夜間外出し又は他人と語を交へることを禁じて慎んで居なければならぬとある。

又調和毗那耶迦法と云ふのは、聖天の御機嫌を損じた時、その怒を鎮めるために行う法で、聖天が怒つた場合は、行者が夢に驚いたり、畜生や惡境界に墮ちた夢を見たり、覺めて居る時にも種々の不祥な魔の障害を受けるので知れる。その修法は饅餅五個と蘿蔔根の煮たもの三本とを供物として香を燃き、東から西に向て坐り、大自在天咒を百八度稱へ、壇に供へた供物を西の門を出て捨てるのである。(雙身)

聖天に福を願ふので無くて聖天を祈つて自分を害する物を除かうとするのは。多く先に出た單身の像を祀り(雙)惡人を降伏する法としては、自分の脚の下に惡人の名を書き、一日一夜斷食して水も飲まずに禁縛印を結んで阿毗遮咒を稱へよと教へ、多舌の者に秘密を漏さしめない法(三、四)などもある。然し阿毗遮咒などを稱へる所は寧ろ不動の領分のやうである。

二

聖天の印度名がガネーシャであることはこの章の初めに云つた。ガネーシャはガナ(Gana)とイーシャ(ISH)の結合名詞で、群少のガナと稱する濕婆の侍神の將帥主長の義である。これ即ち使咒法に「毗那羅義伽が九千八百の諸大鬼王を率ひ、これに將となりて三千世界を巡回せり。」と云ふのによく一致してゐるが、印度で



ガネーシャ  
照參下以頁六五

は智慧の神として、彼の摩迦婆羅多記の如き法をヴァーサ仙人が口述するのを、ガネーシャが筆記したなどと云ふ傳説もあり、學校へ通ふやうになつた子供は、先づ天神様へお参りするやうにガネーシャに参詣する風になつてゐる。支那日本では智慧の方は文珠と虚空藏の二菩薩に降参したかして、障害を除去する方面だけが傳はり、更に施福神と變じたのである。印度の神話では、ガネーシャは濕婆即ち大自在天の妃のパールワティー（佛教で烏摩妃と云ふ）の垢から産れたとし、象頭の因縁として面白い傳説がある。烏摩妃がその子ガネーシャの美貌を自慢した餘り、日の神の子のシャニ（Sani）に「まあこの子の可愛い顔を見て下さい」とか何とか云つて見せると、力弱いガネーシャの頭は恐ろしいシャニの威力に射られて焼けてしまつた。シャニは日の神の子だけに、熾烈な火がその眼から燃出してゐる獐惡の神である。

聖

天

五七

烏摩妃は大事な子の頭を焼燼されて泣いて居ると、其處へ梵天が現はれて「この子を蘇生させやうと思ふならば、今から一番最初に出遇つた者の頭を切てこの兒の頸に續けば助かる」と教へた。丁度折悪しく出遇つた者は象であつた。

一説はに一日烏摩妃が浴室へ入つてその子に浴室の戸口を閉して番をさせて置いて、何者でも中へ入れてはいけないと命じて置いた。と其處へ濕婆が來て浴室へ入らうとするので、ガネーシヤは母の命令を守つて濕婆を拒み、遂に神の怒に觸れて濕婆のために頭を刎られてしまつた。濕婆はガネーシヤを殺したものの、流石の濕婆さへ一目置いてゐる山の神の怒に遭ふのを恐れて、傍に居た象の頭を切つてその頸を續いて置いたと云ひ、又一説には烏摩妃が自分勝手に空想に任せて惡戯に象頭に作つたと云ひ、又或時濕婆は日の神アーディテイヤ(Aditya)を殺して後悔して又蘇生させたが、この罪のために濕婆は迦葉仙の咒咀に會つてその子

ガネーシヤの頭を刎られ、帝釋の象の頭を付けたとも傳へてゐる。

一牙の説は一日バラシユラーマが濕婆をその宮殿へ訪ねて、カイラーサ(Kailasa)の山へ來たとき、丁度濕婆はまだ睡つて居たので、ガネーシヤはバラシユラーマを拒んで内へ入れなかつたから、二人の間に鬭争が始まつた。ガネーシヤはその鼻でバラシユラーマを卷付けて振廻したので、バラシユラーマは一時氣絶して倒れたが、やがて起上つて濕婆の神から貰つた戰斧を投げ付けると、ガネーシヤはそれを避けては父の神の威光に關すると云ふので、戰斧を牙で受け留めたために、一牙を折られたのであると云ふのである。

聖天の象頭に關する説明は經軌には含光軌に聖天は權者であるから他の毗那夜迦と異つて象頭を現じた。その理由は象はその性質曠恚強力なれども、よく調象者の命をきく如く、毘那夜迦も亦障害と同時に歸依の徳を有し、又香塵を愛す

る故だと云ひ、阿婆縛抄に「象はこれ姪欲熾盛の者なり、毘那夜迦も亦爾り、仍て頭は象に似る」とある。これは瘴猛暴惡を喻へて狂象と云ひ、交尾期の野象が訓象を襲ふ熾烈な淫情などから、障礙神生殖神の象徴としたものかとも思はれる。一牙の説の説明は無いが、現に使咒法に八名を出すうちに一牙とあるは、梵名のエーカダシタ又はエーカダシトラ (Ekadanta, Ekadantastra) に相當し、六臂の像の特徴にもなつてゐる。

印度の神話を見ても氣の付くやうに、毘那夜迦には智慧、除障害の神としてよりも、寧ろ暴惡神速の障害者の觀がある。使咒法に「黒頭魔王」と名け、梵にヘーラムバ (Heramba 暴慢) と名け、含光記に「毗那耶迦常に(行者に)隨て障を作すが故に常障魔と名く」と云ひ、大教王經六に如來が行者の懈怠を誡めて種々の天魔幻惑を説くうちに「毘那夜迦行人の身心に入りて障難をなす。或は

人に對して目前に種々の相貌を出現し、及び夜夢の境界に佛の形を現作し、或は菩薩諸天梵釋の形像と作り略或は(行者をして)口中に美味蜜の如きを得しめ暗室に於て日(中)の如く明ならしめ略或は睡り足らしめ、或は睡なからしめ、或は人をして聰明ならしめ、或は暗鈍ならしむ。此の如き異變並にこれ天魔鬼神心に入りて行人をして道を障らしむる因縁なり略行者はかくして道果を成ぜず、死して魔宮に入りて(魔の)眷屬とならしむ」とし、不動尊威怒王使者念誦法に「我當に晝夜擁護して諸魔毘那夜迦をして諸の障難をなさしめず」と云ひ、聖無動尊一字出生八大童子秘要法に「或は軍荼利菩薩は常隨魔を調伏す。謂く毗那夜迦及び人魔或は焰魔特迦略不動明王は恒に行者に隨ふ(故に)若しは天、若しは毗那夜迦、若しは龍、若しは鬼のなす所の障礙一時に消滅す」と云ひ、烏樞瑟摩明王經上にも、行者は明王の德に守られて、毗那夜迦は行者を伺ふことへさも、

叶はぬと述べてある。

然るにこの強力暴悪なる障礙者は、佛教一般の例によつて、行者に恐怖せらるればせらる、だけ、行者が又、その歡心を買ふ地位に立つことになつて、一轉して（或は並行してゐた現像かも知れぬが）種々の修法を修する時には、先づこれを祈つて、豫め障害を留めて置くことになつた。即ち修法の壇場の守護神であるかの觀が出て来た。即ち念誦供養には「若し此法を知らざる者は餘尊法放れて成就するを得難く、また障礙多し。故に此の道を修すべし」とあるやうに考へて来た。

障礙神が除障礙神と變じた形では聖迦拏念怒金剛童子菩薩成就經上に毗那耶迦を羅刹と同類に數へて、羅刹と共にこれを召して、行者が仕侍者として使役する法を説き、行者が人間の鬚髻を頭に載いて一定の法式によつて修法を行へば、

第七日に「美貌の女人が身を嚴りて（行者を）幻惑す。（行者）慈心を起し彼を觀すれば退いて現れず。第三七日即ち毗那耶迦を見及び羅刹極惡の形容を見、即ち降伏して使者となす」と云ひ、又同じ經の次上に、補沙鐵で金剛杵を作つて如法に念誦すれば、杵は變じて毗那耶迦主仙となり、魔衆の障礙を自在に消滅するを得ることが説いてある。又阿婆縛抄百四には陀羅尼集經を引いて、軍荼梨明王の圖像中に鬼王の侍者として毗那耶迦を畫くべきこともある。而して次第に毗那耶迦は惡神から善神の性格に變化し來り、又その大威力を發揮して、或る點では全然親の温婆と同一視せられ、儀軌に秘法云と引文して「六通自在の故に聖天と名け、智慧自在の故に大自在天と名け、敬愛を成就する故に雙身毘那耶迦王と名け、五穀を成就する故に六臂天と名け、魔醯首羅智に自在にして、大海の龍王雨を降らす時、悉くよく分別してその滌を數へ、一念のうちに於て皆明了にす。この聖

智慧を以て説くこと自在なるに依ての故に大自在天となすに至つた。これは畢竟大自在天即ち濕婆の崇拜が盛になつて來たのに附隨して起つた現像で、聖天の異名として大聖歡喜自在天とさへ呼ぶに至つたものである。

聖天はもと暴惡の少神であつたのが、一面その暴惡に幸せられて、修行者のために歡心を買はれる境界になつた。而して次第に威神力を増し、嫌惡すべき破壊神は修法の始には必ず請召せらるべき神となり、大自在天の地位をも侵す尊信を得て來た。が然しその破壊神たる性格を全然捨てることは出来なかつた。否寧ろ印度教の神の一般的傾向に順つて、一面に善の功德が増加すると共に他方には必ず暗黒神的暴威も増加して來た。而して其所には何かの調和が無ければならぬ。これ即ち雙身像の依て生じたる所以では無からうか。その上聖天の父の濕婆は男根を以て象徴する神であり、母烏摩妃は愛欲の深い神ではあるが、時には戰慄す

べき残酷な行爲を敢てし得る神である。この二神の思想が自然聖天のうちにも流れ込んで、光明と暗黒との調和が出來ると共に、茲に始めて生殖神としての聖天の神格が發芽したのでは無からうか。雙身の思想は印度教のうちにもある。(像は無いやうであるが)だから印度神話中もドキデーハ (Dakṣiṇya 雙身) と稱する聖天の一名がある。

經軌と末書には種々に苦心して雙身像の説明に努力して居るが、要するに和合神として權實不二の象徴としてゐるに過ぎない。註釋者が色々に想像をめぐらし調和に勉めた點を見るために二三の例を出して見やう。

念誦供養法には大自在天と烏摩妃との子三千人あり、各千五百人が黨をなし、一は毗那夜迦王を主長として十萬七千の諸毗那夜迦類を領して惡事をなし、一は扇那耶迦を主長として、十七萬八千の施福者を領して善事を行ふて居た。此の扇



那夜迦は即ち觀音の化身で、毗那夜迦王を調和するために同胞一同が夫婦となつて相抱同體の形を示現したと云ひ、阿婆縛抄十九に出た一説にも、觀音が女形となつて毗那夜迦を教化したことを説いてある。又含光記に觀音を實者、毗那夜迦を權者として説いて、大聖天は佛の化現にして、種々の毗那夜迦をして正見に入らしめたと云つてある。

この權實の見解によつて最も注意しなければならない事は、今迄の毗那夜迦が聖天であると云ふ見方から一變して、これを教化した女神が主であるとなつた點である。溪嵐拾葉集十に「男天は大日即ち實者なり、女天は十一面觀音即ち權者なり、權實不二の相を表する爲に雙身の相を現するなり。」とし遂に女天を以て主となすの説にまで論及して居る。

これでは何れが主人だか解らぬ夫婦が出来上つたわけである。さてこそ阿婆縛

抄百四にこの二神を國王の妃と大臣との像として、二人が姦通したので國王の怒に觸れ、國王は大臣に毒を飲ませやうとしたのを、妃が告口したので大臣は僅に身を免れ、反て王を怨んで鬼となり、象頭長鼻の強力者と現じて、王の妃と抱擁してゐるのだと云つてあり、次に軍荼利夜叉の婦人禪那夜迦と大自在天の子聖天との姦通像であるとしてある。然しこれは後世の附會説に過ぎない。

聖天を和合神と云ふのは註釋家や傳授者の口實であらうと思ふ。和合は施福に何の關係も無い。聖天がすでに雙身の相を現じ、男女抱擁の形として秘密の裏に群盲の尊崇を受けるのは、生殖神として繁殖を意味する施福神である故である。和合神ならばいもりの黒燒の代理をもする筈である。俗書には多少その方面の功德を書いて居つた、左京大夫道雅が齋宮を戀して聖天に頼んで取持させた傳説があり、その聖天はその罪で鎌倉へ流刑に行はれてゐるが、經軌には立身出世、富貴

榮達が表面になつてゐるらしい。

印度教の一小神から魔神となつたのであるから、現に先に引用した大教王經六には聖天が種々の幻惑を行つて人を迷はし、死後に魔界の眷屬としやうと勉めてゐるとの佛の教さへある。我利我利亡者は聖天の俗信に釣られて魔界に墮ち、聖天を賣物にして祈禱をしてやつて金を取る坊主は地獄へ墮ちるだらう。

以上の略述した經過で見れば、誰の目にも聖天が印度教から佛敎へ入つて来た生殖神であることに思ひ到ることと思ふ。夫婦抱擁の像は聖天のみでなく、どうかすると降三世明王かとも見える像にもある、然し降三世明王は佛殿に入れるなど云ふやうな禁令は見當らない、と云ふのは降三世明王は淫欲の脱離、愛欲の破壊者であつて、生殖神で無いからである。

聖天を讃歎し聖天の功德を説くことを目的とした經軌にさへ麗々と佛殿より掛

斥した神である、これを祀る僧がこれを秘密にするは流石に良心の呵責を知つてゐるためであるか、或はその臭を蓋ふものであるか、聖天に對してはその秘密主義も思ひ半に過ぐるものがある。八ヶ間敷い善光寺の本尊にさへ御開張がある、待乳山その他の聖天の開帳は、坊主が聖天を賣物にして口すぎをしなくなつた日を待たなければ來ぬだらう。元亨釋書十公尹の條に、「檀信尹を請して毘那夜迦天を供せんとす。尹諾して修せず。數日後檀越來りて曰く、師の修供によりて事已に濟めり、故に來りて謝するのみ。(尹)對て曰く、我又精しく修せりと。時に壇中に細微の音ありて曰く、我供なしと。檀(越)歸りて(後)尹壇に入りて(歡喜)天の像を取て溪谷に抛て曰く、汝我を辱しむ。我又汝を辱しめむと。尹恙なかりき」とある、流石に信徒から怖れられてゐる聖天も茲に至つては一文の價値さへ無いものとなつたのである。

淫祠と邪神

七〇

聖天に關する書籍は、その秘密主義のために手に入り難いものである。

## 稻荷

稻荷神社はもとは立派な純粹な神道の社であつたかと思はれるが、これも亦後世の種々な傳説やら迷信やらが加はつて、豊川の稻荷などになつた時は、全然印度教的の淫祠になつたやうに思はれる。

何處の神社でもその建立の因縁とか縁起とかは神主が勝手に作つたものが多いので、荒唐無稽のものが多數を占めてゐるが、稻荷神社の總本家の觀のある伏見の稻荷に就ては、神道の傳説と佛教的の傳説との二つがあつて、何れもあまり技巧を弄してない、期する所があつて惡意を以て作り出したので無い、何れかと

稻

荷

七一

云へば野趣を帯びたものである。その一つは元明天皇の和銅年間に山城の伊奈利山に秦氏の長者が居たが、富貴にまかせて次第に増長し、一日餅を的にして弓の稽古をしたところが、箭が餅の的に當ると、その餅が忽ち白鳥に化して空に飛去つたので、茲に始めてその罪を後悔して稻の神を祀つたと云う説である。他の佛敎的の説は智證大師が弘安十二年に熊野へ參詣した還向の途中、紀伊國石田河下稻羽の里を通る時に一人の老人と二人の女とが居て稻を蒔て居たのに逢つた。この三人の者は即ち化人であつたのでこれを稻蒔大明神としたと云ふのである。又稻蒔大明神流記にこの二説を混一して和銅年間の創始と弘法大師とを強て結付けやうとしたやうな説を擧げて、和銅年間から百年許りの間、龍頭太と云ふ不思議な男が居た、その顔は龍の如く、顔面から光明を放つて夜でもあたりを晝のやうに照して居たが、この男の性は荷田と云ひ、この男が稻を蒔て居る時に弘法

に出逢つて稻蒔として祀られたのであると云うてある。

稻蒔の神は五穀の神でその本尊は倉稻魂命を祀つたものであらう。倉稻魂命は伊勢の外宮の豊受大神と同一の神である。秦中家忌寸等の遠祖にあたる伊侶具秦公が五穀の豊熟を祈るために倉稻魂命を祀り、合せてその神の父母の素盞鳴命尊と大市姫命とを祠つたもので、爾來農業を以て建國の基礎として居る國だけに非常な尊崇をうけ、都近いために行幸なども仰せ出されたものと見える。

ある神社が諸人の尊信を得て有名になればなる程そこに不可思議な説を流布して彌よその神の尊嚴を大きくしやうとする愚人のあることは、何時の世にもその例のあることである。そして奇怪な傳説を流布する本人はそれが却て神の徳を毀けるものであることに氣が付かないことは憐れむべき次第である。稻蒔に就ても人々はたゞ五穀豊熟を守護する倉稻魂命とだけでは満足が出来なかつたのであら

う、遂にはこの神を始めて祭つた伊呂具秦公を悪者にし、稻倉魂を白鳥にして「此鳥神は田穀を成幸給ふ宇賀之御魂神にて、食津物を麓忽に射戯れしを怒らせ給ひ斯在奇異状を示して、神靈の顯坐るにこそあらめとて御親神(素盞鳴)と共に三座の社を營建て齋祀りしなるべし」(稻荷神社考上)とするに至つた。

三柱の神には或は異説があるが本社の稻倉魂だけは異説は無いやうであるからあまり探索する必要もないと思ふ。この稻荷の三神に本地垂迹の説が加はり、稻荷と云ふ字義から附會して今度は弘法だとか智證だとかと因縁をつけかけて來たので第二第三の傳説が出て來たのでは無からうか、弘法大師や智證大師の時と云へば平安朝の初期で、日本は可なりよく開けて居たから、稻を荷つて居る三人連の百姓位はざらにあつたゞらうと思はれる。

古來から可なり靈驗が傳はつてゐたので、天長四年正月には淳和天皇の御不

例を稱して稻荷の神木を伐つた故だとして、その平癒を祈つたとき、忽ち驗があつたので、稻荷に位階をお授けになつた(類聚國史三十四)とか、下て源平時代には高博と云ふ者が母の重病に手を盡したけれども療治の効がなかつたので、稻荷の社に七ヶ日參籠して居たが、第七日の夜琵琶を執て上玄石象の曲を弾くと御寶殿中から金の扉を押開いて、みづらの童が一人出て來たので、高博も神慮の御受納を憑しく覺えて即ち下向してみると、母の重病もたちどころに平癒して更に恙なくなつた(盛衰記十二)と云ひ、頼朝が天下安全、武運長久、兇徒平定を祈つたことは國史にも出てゐる。又元亨釋書に桓舜が貧を苦にしてゐる山王を祈つてみたが驗がなかつたので今度は稻荷明神に祈願を込めてゐると、七日目の満願の日の夜になつて明神は美女に現はれて桓舜の胸を開いて紙に千石と書いたものを入れたと思ふと、其所へ山王の權現が現はれて思ふ仔細があるからと云

つてその紙片を取てしまつたので、桓舜は利欲の念を捨て、高僧となつたとある。高博と頼朝の場合と同じ時代ではあるが、清盛の祈り方には別種の信仰があつたやうにも見られる。この時は稻荷はその性質に變化が生じて茶根尼とか狐とかの信仰が混つて居たらしいと思はれるからである。

稻荷を祀るに二月の初午の日を選んだことは何に據たことであるかは不明であるが、随分古くからあつたと見えて、大鏡八に「きさらぎの三日はつむまといへど云々」とあり、今昔物語二十八の近衛舍人共稻荷參詣重方值レ女語第一に「衣曝の始午の日は昔より京中に上中下の人稻荷詣とて參り集るの日也」とあり、その記事を見ると盛大な祭典であつたやうである。世説問答には弘法が稻を負うた老翁に逢つた日が二月の午の日であつたからと云ひ、年中重寶記一に元正帝の御代に當社影向し給うたのが丁度二月の初午であつたと云ふけれ共、共に後世の

書であるのでこれだけでは大鏡や今昔物語の記事から得た附會説とも見られる。或は春の初めの午の日を選んだ、これから次第に氣候も陽氣に向つて來て、此の春から秋へかけての五穀の豊熟を祈る意味にしたものかも知れない。

狐と關聯した稻荷のことを云ふ前に、稻荷の名稱のことを一寸注意する必要がある。稻荷の字とイナリの讀み方とに就て、伊奈利山と云ふ地に祭つた神であるからと云ふ説、稻荷の轉とする説、稻を荷つてゐた化人から取つたと云ふ説、多分の附會説であらうと思ふが、及び諸社一覽三の「當山地主神、稻田明神の地に倉稻魂を鎮坐し奉る故に、倉稻の稻の字と、荷田の荷の字を取て號とす」とある説とがある。第二説はイネカリがイナリとなり、荷が荷に轉じたと云へばあり得べきこと、肯かれ。第一の説には何故に稻荷の字を當てたかの説明が無いと共に、第三説には如何にして稻荷をイナリと讀み來つたかの解釋が缺けてゐる。ある説に駿河敦賀を

スルガ、ツルガと云ふやうに、荷のエヌがアールに變化したのだとあるさうだ。これも尤な説である。國學者の説は稻生から來たのだと云ふが、矢張り荷の字に就ての説明は不詳である。

二

稻荷が狐と同體になつたことは佛教と結びついてから茶枳尼の思想が入つて來て茶枳尼と狐とが混同した結果とも見られるし、又反對に元來山城の稻荷の社の邊には狐が住んで居たのが、神の使とか何とか云はれるやうになり、狐に對する迷信に助けられて遂には本尊の倉稻魂命よりも狐が稻荷であるかのやうに考へられ、密教で説く茶枳尼が奇怪な魔性であるのによく似て居るので三者が合一したとも見られる。最も正しい説明のやうに思はれるのは、稻倉魂神を三狐神と書

いたので狐になつたと云ふ説である。倭訓栞に「三狐神は御饌津の義也」と斷定し、茅窓漫録中に「本原を委しく推し尋ぬるに、鎮座傳記云、素盞鳴尊子宇賀之御魂神、亦名專女三狐神、此二句下の七字より事起ると見ゆ、中亦名專女三狐神といふ七字、古書字音に暗き人讀み誤りしか、利を釣る餌に牽強せしかはしらざれど、是七字より外に稻荷に野狐のあづかる事更になし」と論じて、專女三狐は燒米御食津神にして野狐をタウメと呼ぶことは古書正史に無き所であると斷じてある。

多分この説が正しいだらうと思はれる。

この頃からかけて狐を不可思議な獸類として居たことは到底想像も及ばぬ程で一度稻荷明神の使者と呼ばれるやうになつてからは狐は一種の魔性のものゝやうに考へられ、稻荷の信仰と狐の迷信とが兩々相待て人の心の弱點にふかく染み付

いたものであるらしい。

狐を稻荷の使者のとする事は大分古くからあるやうで、東寺執行日記私用集二に命婦のことを記して、舟岡山に白狐の夫婦あつて「夫の身は毛白くして銀針をならべたる如く、尾の端あがりて秘密の五古をさしはさめたるに似たり、婦は鹿の首、狐の身あり」畜類の身ではあるが天然の靈智を得てゐたので神の眷屬として戴きたいと願つたので、明神の使者となつたと云ふ。夫は上の宮に仕はれて小茅と呼び、婦は下宮に仕へて阿古町と呼んだとある。稻荷鎮座由來記にも同様の説を出した後、至徳三年五月の日附があるから、二の説は南北朝時代まで下るものと見られるが、その以前建永元年八月十六日に陛下が命婦の社に御幣をお供になつたことが明月記にあると靈獸雜記に出てゐる。命婦の社と云ふのは阿古町の狐の異名で、この起源は一條院の御宇に進の命婦が七日間明神の社に參籠し

て神の加護によつて立身して宇治殿の妾となり、次で北の政所となつたので命婦と云ふ舊の自分の稱號を阿古町の狐に譲つたのである（稻荷神社記秘訣の説であるが、宇治拾遺にはその出世の因縁を清水の觀音及び法華經と寺僧とであるやうにしてある。稻荷神社記秘訣の説は少々疑はしい。）してみると命婦の社は下宮であるべきであるのに、橘窓自語中には上宮を命婦社と云つて狐を祀つたものであるとし、阿古町、黒尾、尾薄の三狐を祀つたのは稻荷の三社では無いとしてあるから、狐の社は稻倉魂命外二社の神の使の社であると云ふ意味らしい。

命婦の社が上宮であらうと下宮であらうと重大な意味は無い、たゞ茲では狐が立派に稻荷の社に祀られて神の使としてよりも以上の尊敬をうけて陛下から御幣を給はつたり宮中の女官の官名を名のるに至つたことに注意しなければならぬ命婦と云ふのは阿古町狐の社であるのが堪囊鈔三には「狐を祝ふ社」女神にて



ましませば女官に準じて命婦と云か、元來その名の神の使か」とあるのを見るとその始めは、狐の社を直ちに稻荷と呼んだやうにもない。知足院忠實が大權坊と云ふ驗者を請待して二七日間大法を修した時、一人の女が現はれたので、その女の脊に垂れてゐた髪を引くと髪は切れて女は姿が見えなくなつてしまつた。不思議に思つて手に残つた髪を見るときは狐の尾であつた。忠實はこの狐の尾を妙法院の護法殿に納めて置いたが、やがて冷泉東洞院に祠を建て、福大明神として祀つたと著聞集に出てゐる。この場合は狐は施福神であり五穀豊熟の守護神である稻荷の使者と見て福大明神として祀つたものと見える。この時は明かに狐そのまゝが稻荷とはなつてゐないのである。下つて新著聞集の中に、安藤大學の頭が人から借りた孔雀を狐に殺されたのを怒つて、邸内の稻荷の祠を壊すと、一匹の狐が夢に現はれてその冤罪を歎いて居たが、三日目に又現はれて罪人を罰

して置いたと云つたので、早速庭へ出て見ると一匹の狐が殺されてゐたから稻荷の祠を再建したとある。これは稻荷即ち狐である。それかと思ふと同書の他の處では、狐が「自分は神通力を持つて居て、貴狐明神と云ふ神號を授かり、且つ稻荷明神の使者である」と云つてゐるから、狐即ち稻荷とも見られ、狐は稻荷の使者であるとも見られるのである。

これは恐らくは筆者は當時の識者に屬する人であつたので、狐をそのまゝ稻荷とすることを避けて書いたものかとも取り得るのである。徳川時代には民間では概して狐と稻荷とを全然混一してゐたのである。

俗説によると狐は稻荷として祠られるまでは度々伏見の稻荷へ官職(神位)を受けに行つて、次第に出世するものであるとしてある。修業を積んだ老狐は野狐に對してある點までは支配權を持つてゐるものとしてあり、修業の功德によつて尾の

先から次第に毛が白くなり、體軀全體が白くなつたものは飛行變化の術に達した立派な神であると考へられてゐた。本朝故事因縁集に因防の郡濃郡久米村の獵師が狐を撃つて、誤つてその尾を撃切つた。見るとその尾は先の方が白くなつてゐた。すると狐が現はれて、あの尾は稻荷へ七度參詣して漸く許されたもので、あの尾がなくては邪法を行ふことが出来ぬからどうか返して貰ひたいと云つたとある。知足院忠實の話と參照して狐の尾に對する神秘觀と、野狐がある修業を経て神になると云ふ俗信とが窺はれると思ふ。

狐の官職のことは可なり古くからの傳説で、三才圖會三十八に「相傳ふ、狐は倉稻魂の神の使なり、天下の狐悉く洛の稻荷の社に參仕するなり。人稻荷の祠を建て狐を祭る、その祭るところの者は位他の狐に異る」と云ひ、本朝食鑑十

一には三才圖會を引て次後に「よく華表を超えよく妖魅をなすはその妖術の長たり、その長せる者に從ひて神が位階を授くるに品(等)あり。略上古使狐の事ありや、未だ然る所以を詳にせず。おもふに村々家々もと狐ありて常に隠れて見えす、故に村里家墅、間地あれば必ず小祠を構へて稻荷と稱し、以て狐神を祭りて福を祈り災を禳ふなり」とある。

この華表を飛越すことはそれが狐の神位を高める試験になるので、新著聞集の伊勢の商人が生きながら稻荷になつた話にも、狐が伏見の稻荷の華表を飛越え飛越えて居たのを見て居るうちに、自分も狐に誘はれて鳥居を飛越えて居るやうな心持になつた。國へ歸つてみると果して家人は狐だと云つて相手にしてくれなかつたので、海邊に小舎を作つて後稻荷となつたと書いてある。この傳説は現に稻荷の社には幾百の華表を献上してある理由となつたので、華表の多いだけそれだけその狐の神位の高いことを意味するわけであらうと思はれる。

俗信の中では、稻荷が稻倉魂命であり、五穀豊熟を司どる神であることは全然忘れられてしまつた傾があると同時に、稻荷と云ふ名は全然狐の神秘的のものを意味し、又は總ての狐が稻荷大明神とか正一位とか云ふ尊號を受くべきものと考へられ、かくて「在々處處々の小祠或は都下の市中に在る稻荷の祠など、數にも足らぬほどの賤き神を正一位に叙し、白河吉田の兩家より宣旨を申し下して巫祝の輩に與ふる事甚多し、されば處々の神廟に正一位の額を掛ざるは稀なり」(經濟録)とまでに至つたのである。

然しこれは時代時代によつて次第に變化して來たと云ふ意味、即ち平安朝から鎌倉時代には單に狐は稻荷の使とし、徳川時代になつてからは全然狐は稻荷の名を專有したといふ意味ではないので、平安朝末の清盛の傳説などは或は狐そのものを稻荷(茶根尼)と見ては居なかつたかとも思はれ、徳川時代のものでも、狐

は稻荷明神そのもので無いと書いた識者も澤山あることであるから、一律には云はれないが、俗間の信仰は先づ徳川時代になつてから稻荷即狐となつたと見て至當だらうと思はれる。

倭訓栞には「鄙俗は狐を直に神とし、祭りて福を祈る事、天下風をなせり」と云ひ、茅窓漫録に「いつの頃より何者のいひ出だし、か、野狐を稻荷の神使と稱し、初午の日は天下第一統貴賤押しなべて家々に持離し、赤小豆飯油煮等の供物種種と、のへ、町家士民の中にも、其格式定例ある家は、居室のうちに鎮守の小祠稻荷を勧請し、正一位大明神の職を立て、往來群衆いはむかたなし略野狐はもと淫獸妖魔の物、北方陰地に多く居て白晝の中は幽闇の間に隠れ、夜中のみ出て物を掠め取り、人を惑し冤をなす略此等の妖魔次第に行はるゝにより貴賤上下押しなべて野狐を尊恐すること鬼神の如し、妖巫邪覘の輩は流行の時勢に乗じ、

種々の奸悪をめぐらし、一の獸穴を見出だす時は稻荷の來現と稱し、又狐惑の人あれば神降りたまふなどいひ觸らし、神職掌る家に授位を請へば、直に正一位大明神を賜はる。其より己が居宅に社壇を構へて、鳥井瑞垣等の物を飾り、木綿綴をかけ、幣を持ちて人の吉凶禍福、物の得失出入、或は病の治不治、方角の善否をいふ。これを窺ひ又は御指圖など稱し、所々に数多あり、故に近歲新造の社に稻荷ほど流行するは外になし。畢竟は愚昧文盲の鄙俗おのゝ淫獸妖魔の智を假りて、福を求め利を得むとするより、次第に行はるゝなり」と。これが恰も現今の稻荷の有様である。

元來 狐は可なり昔から不可思議な獸として考られてゐたので、元來は支那の起原でないかと思はれる、西陽雜俎に野狐を紫と名く、夜尾を撃て火を出す。怪をなさんとすれば必ず觸體を戴いて北斗を拜し、墜ちざれば則ち化して人とな

ると云ひ、抱朴子に狐狸豺狼皆壽八百歳、五百歳に滿れば即ち善く變じて人形となるとあると谷響集七に引き、同八には「狐千歳にして始めて天と通じて魅をなさす、その魅する者は多く人の精氣を取りて以て内丹となす」とある。日本では平安朝の初期の傳説を集めた靈異記などにも話が出てゐる。(勿論靈異記は何でもかでも不可思議なものとして取扱つてゐるが)百練抄等に延久四年に藤原仲季が白專女を殺したので土佐に流されたとあるのは多分白狐であらうと思はれる。專女と云ふ言葉は土佐日記には老女の意味に使つてあるが宇治拾遺には明かに老狐の意味であるから、白專女と云つて、わざわざ白とことわつた所を見れば百練抄も多分專女を老狐の意味に使つてゐたのでは無いかと思はれる、白狐を殺して流罪に逢うとは今日では變なことであるが、迷信の力の強い昔では全然有り得べからざる事でないかと考へられるのである。平安朝時代に狐は妖術者として畏怖せら

れ、その怒と復讐とを恐れるのあまり神聖視せられた傾さへあつた。

妖術者としての狐は佛教で云ふ六神通即ち他人の心を知り、空中を飛行し、一切のものを見、變現自在の通力を持つて居るかに考へられた。恨を抱く者の家に放火した(宇治拾遺)とか、春日の宮司中臣の某が杉の小枝を銜へて居るのを杉の大木と見た(今昔物語)とかある。特に同書の高陽川の狐と衛士の話などに至つては全然後世の野次喜多の面影があつて面白い。

狐は又淫婦として取扱はれた。燕石雜志一には狐は人を魅するもの、千古の淫婦として印度支那日本に活躍してゐる。或は狐が人の妻となつた(靈異記、法華傳)と云ひ、人の妻に化けて來た(今昔物語、本朝因縁集)とも傳へ谷響集八には寛平年中に備中のある男が頓に女を思ふてゐると狐が變化して來て、共に倉の下に棲で居た話を載せて、これは元來狐は陰性のものであるから、男子を誑か

してその陽の精力を取ることを好む故で、雌狐が男を魅くのみでなく雄狐も亦男を誑かすと解してゐる。さう聞けば狐が男(女に對しての)と變化した話は一寸見あたらぬやうである。そして一方には狐のこの性質から來て稻荷を情事の神と考へて聖天道祖神と同列にしたものもある。即ち新猿樂記に、本妻は年が六十で夫は四十位の夫婦があつたが、妻は自分の色を衰へたのも知らず、常に夫がよく世話してくれぬを恨に思つて、本尊の聖天に禱つたが驗がなかつたので、去て道祖神を祭つたがこれも亦靈應があるとも見えなかつたから、今度は野狐伊賀專の男を祭つて、蛇苦本を叩いて稻荷山阿古町の愛法を行つて喜んでゐたと云ふやうなことが書いてある。

狐を施福神としたことは先にも云ひ、又茶根尼の節にも出るから一々書く必要もないと思ふが、燕石雜志一に「稻荷の社壇に置く木狐に玉と鍵とを衝したる

は稻倉魂のたまを象り、鍵はこの神五穀を主り給ふといへば倉廩を守る義を表するや」とあるのは多少如何はしいと思はれる、これは矢張り通俗に解して、施福の如意寶珠と寶庫の鍵であると思つた方がよくはあるまいか。一説に狐の玉はその神通力を現はす道具か何かのやうに解して、今昔物語十七に狐が玉を取られて「その玉取りたりと云ふとも、持つべき様を知らねば和主の爲には益あらじ我はその玉取られなば極じき損にてなむあるべき」と出てゐる。

狐に關する迷信は上は平安朝から下は大正の今日まであまりに澤山言傳へられてゐるので、とても書き盡すことは出来ないと思はれる。これは諸君の御見聞にまかす方が賢い遣だと思つてこれに止めて置く。

三

日本の在來の神は平安朝の初期から佛教の思想を混入して來たことは誰れでも知つてゐる事實である。稻荷もやはり佛教の寧ろ悪い思想が混入し或はその悪い思想に奪去られた趣がある。佛教の悪い思想とは即ち印度の俗信の茶枳尼の思想である。

稻荷と云へば茶枳尼を考へるやうに今では不離のものとなつたけれ共、その初めはそんなでもなかつたものかして、本朝神仙傳に泰澄が稻荷の社で數日念誦してゐると、一人の女が現はれて、神の本體は觀世音菩薩で、常には補陀洛に在すと告げたことを書き、元祿七年の稻荷修復の時の記録に、大黒辨天が共に合せ祀つてあつたとあり、(諸社一覽三)に辯才天にして白狐に乗つた像を傳へ、俗間には白狐に不動明王の乗つた稻荷もあるとの事であるに見ると、平安朝以後は何とはなしに色々な神を合祀したこともあり、稻荷の本地を茶枳尼と限らないで居た時

もあつたやうである。

話が印度へ飛ぶやうであるが、先づ茲で茶根尼の本質を調べてその稻荷と結付く経過を探つてみよう。

茶根尼は梵語の Dakini の音譯で、拏吉爾、吒根尼とも書き密教では天部に屬する神であるから陀天とも呼び。印度では暴惡の女神カーリー Kali の侍女で常に人肉を噉ひ、一名飲血鬼 (Assra-Pas) と云つて居る。大日經疏七に最も詳細にその性質を擧げてゐる。

世間にこの茶根尼の法術を行う者があるが、茶根尼の法術とは自在を得るの呪術である。茶根尼は人が命終する六ヶ月前にこれを知て、法術を行つてその人の心を取て食ふのである。それを食へば法術が成就して、一日間に世界中を馳け廻ることも出来、意の欲するところ叶はぬと云うことが無くなる。又茶根尼は自分

の好まぬ者は術を以て病ましめ得るが、人を殺すことは出来ないから、人の死ぬ六ヶ月以前に心を取り、他物を以てその代りに置換へて行く。心を取られた人は壽命の盡きるまで存命して居るのである。初め茶根尼は人を殺してその心を食べるたのを毘盧遮那如來が惡魔降伏の降三世明王の法門に住し、大黒神を化作し大威力を具へ、灰を身に塗り、曠野へ行つて法術を行ひ、茶根尼の輩を集めて、汝等は常に人を殺すから、我は今汝等を吞でしまふと云つて呵責した。茶根尼衆は佛の威光に恐怖して遂に佛に歸依した。さて茶根尼は佛に肉を食ふことを禁ぜられたので、困つて佛の慈悲を頼ると、以後は死人の心を食べると云はれたが、人が死んだ時まで待つて居ては、夜叉の大將共が先を争つて死人を食に來るからとても私共は死人に近寄ることが出来ないといつたので、人の死ぬ六ヶ月以前に人の心を食べることを許されたのである。

これが大日經疏の説明の大體である。そしてこの茶根尼の法を修するものは又茶根尼に等しい通力を得ると云うのである。

佛教の一派で最も多く俗信を混じた喇嘛教では種々の茶根尼を崇拜し、顔を右に向け、脚を舉げて青色の人間と赤色の人間とを踏み、左手に鬲腰杯を持って人血を飲む勢をなし、右手に割肉刀を持つ、額には第三眼あり、鬲腰の華鬘を冠り同じやうな鬲腰の瓔珞を腰に纏ひ、人頭幢を肩にした赤色の像もある。

これで見ても解る通りに茶根尼は一種の鬼神で、印度の外道の俗信であるが、密教では一切の現像を大日法身の顯現であるとするので、これも亦密教の中に取入れられて、彼の衆を佛慧に入らしめんがためにこの法を説くとは云ふもの、支那傳來の經軌には特に茶根尼の功德を説いたものは無いやうである。溪嵐拾葉集九には世の中に阿羅婆沙龔吒根尼經、相歡陀羅尼經、刀自女經、神驗呪王經、



西藏の茶根尼  
九六頁參照



辰狐本因經、吒枳尼栴陀利王經等の經軌があるやうに云つてゐるが、今行はれてゐる大藏經の内には見あたらないものゝみで、就中第三第五などは稻荷と結び付てから日本で出来たやうな名である。

茶枳尼の法は東密と云つて東寺即ち弘法の流と、寺門と云つて三井寺の流との兩方にあつたやうで、比叡山の方には無かつたやうである。平治物語の叡山物語の事の條に、下野宇都宮の御殿に納めた第十九の箱には、宇賀神の法と陀天の法とを籠めて、大師（傳教）手づから印を以て封をしたとある。この頃は自分の宗旨に無いものは何でもよくこんなことを云つたもので、玉石混交で變な馬鹿けたやうなものを持て来て一人の支那歸りが（丁度明治二十年頃の洋行歸のやうに）自慢すると一方では自分の方にもあつたのだがとか何とか云つて、自分の宗旨が玉石混交で無かつたことを誇らうともしないで、反つて蛇足を付けたものである。

然しこの言辭は傳教の弟子共の云つたことで、流石に傳教はこのやうな外道の法は持ては歸らなかつた。溪嵐拾葉集九に「古老の傳にこの吒天の法は東寺と三井寺とに委細に相傳して山門にこれなし。其故は山家御相承ありけれども、相輪塔の下に此法と禪法とは埋められぬ。仍て天台流には賞翫せずと申し傳へたり。黒谷流には代々相傳して秘藏す」とあるも傳教は傳へなかつたと見て差支はないだらう。

日本へ傳はつたのは弘法以來であらうと思はれるが、稻荷神社考下には、文徳實錄仁壽二年二月、越前守藤原高房傳を引いて、天長四年の春高房が美濃介を拜したとき、席田郡に妖巫が居て、その靈が暗い所を轉び歩いて心臓を食ひ、その被害者が非常に多かつたが、昔からの役人は皆恐れてその部落に入ることさへしなかつたのを、高房はその同類を捕へて酷刑に處したとあるのは茶枳尼の所業

であると云ひ、又守覺法親王の拾葉集を引いて、東寺の摩多羅神を茶枳尼だとしてゐる。前説の事件は將して茶枳尼であつたか疑はしいし、後説も疑問のある點である。(摩多羅神のことは大黒の時に云はう)が兎に角その次下に「東寺有二守護天等、稻荷明神使者也。名ニ大菩提心使者神」と云ふのは茶枳尼であつたかも知れない。

東密と台密のある一部に傳はつて來た茶枳尼の法が何故稻荷と混同したかは一寸不明であるが、多分兩者の神怪不可思議な點から考へて茶枳尼を狐精としたから起つた事であらう。

然し茶枳尼を狐だとした説明は勿論經軌には無い、又あるにしてもそれは疑作らしい、吒枳尼栴陀利經には茶枳尼を白辰狐王菩薩としてある邊から見ると、狐が夜中に彷徨して怪をなす者と云ふ點であるとか、人を惑はし誑かし、男の陽の

氣力を嗜食するのは、茶根尼とよく似てゐる邊から密教者が稻荷と狐との迷信に乗じて云ひ出した事かも知れない。恐らく支那では茶根尼を狐だと云つて居たのではあるまいと思はれる。

茶根尼の法は源平時代も大分信じられて居たらしいが然し流石に良心の強い日本人には何となく小氣味悪がられてゐた點もあるらしい、有名な話であるが、清盛は茶根尼の法を修して一世の榮華を極めたことは盛衰記一に出てゐる。清盛が或時蓮臺野で大きな狐を追出して、既に射やうとしたとき、狐は忽ち黃女に變じ莞爾として笑ふて、今我を助命したならば汝の所望を叶へてやると云つたので、汝は誰れであるかと尋ねると、我は七十四道中の王であると云つた。さては貴狐天王かと思つて馬から下りて敬意を表すると、女はもとの狐となつて行つてしまつた。清盛はつくづく案じて「我財寶にうえたる事は荒神の所爲にぞ、荒神を鎮

め財寶を得んには、辯才妙音には不如、今の貴狐天王は妙音のその一なり、さては我陀天の法を成就すべき者にこそとて、彼法を行ける程に、又返して案じけるは、實や外法成就の者は子孫に傳へすと云ふものを、いかが有べきと思はれけるが、よしよし、當時のごとく貧者にてながらへんよりは、一時に富みて名を揚んにはとて行はれけれども、さすが後いぶせく思ふて、兼々清水寺の觀音を憑み奉りて御利生を蒙らむとて、千日詣を始めた」とある。

この話が筆者の虚構ならば知らぬこと、……虚構にしても最も要領を得た虚構である、清盛の奇跡的の榮達とあまりに早いその末路とは、外法を修したとでも云はなければ當時の人の理解心を満足させることは出来なかつたのであらう。……流石の清盛でさへも躊躇した程に「外法」として疎せられ、一種の不義罪惡として考へられてゐた茶根尼の法である。大納言成親が師長の死後、左大臣の位

の欲しさに上加茂に禱つたとき、社の御寶殿の後の杉の洞に壇を立て、ある聖僧を呼んで茶根尼の法を百日間行はせやうとしたら、雷が落ちて大杉が焼けたので、遂に發覺して外法を行ふ聖僧は逐出された（平家物語一）ことは當然の運命であらう。

然るに太平記二十六に妙吉侍者のことを書いて、足利直義が夢窓國師の弟子となつて大に榮えたのを見て、國師の法眷の妙吉侍者がうらやましく思つて、仁和寺の志一房を頼んで茶根尼の法を習つて三七日行つたら、頓法立どころに成就して心に願ふことは聊も叶はぬこともなくなり、遂には國師の推舉をうけて諸人の師となり、一日の布施物は山と積む程あつたとある。妙吉侍者は禪僧であつたので、子が無かつたかして茶根尼も子孫に禍しなかつたと見える。太平記にはその後のことは何も書いてない。

要するに茶根尼は惡魔である。鹽尻四十六には佛敎の茶根尼を地藏菩薩の化現で、地藏はその相を鬼類に現じて悉伽羅野干となり。季の世この野干を祠りて茶根尼と稱して福を求め幸をいのり、或は稻荷と呼び幣帛を捧る族多しと記してある。こんな都合よく行けば云ふことは無いが、これは著者が狡猾な坊主の虚構を聞いたまゝ書いたに過ぎぬものであらう。三十二社徵考中に「諸書にくさぐささしたすれど、皆俗巫の説、或は浮屠氏のさたにて、さらにとるにたらず」とあるは至言である。

茲で稻荷と茶根尼と狐との三者の關係を見ると、稻荷の神が先づ狐又は狐を使獸とし、一方狐と茶根尼とが同一になり、遂に最後に茶根尼天豊川稻荷と云ふやうなものが出来たのであらうと推定することが出来る。

外道の食人鬼を麗々しく名乗つて豊川稻荷茶根尼天などと云つて浮氣商賈の連

中の金をせしめる禪僧は妙吉侍者の眞似をするのであらうが、せめては清盛位の良心の片影でもあれば幸である。

こんなことを云つて茶根尼を祀ることを罵倒すると、茶根尼は護法神だとか何とか云ふであらうが一人として獸(や食人鬼)に手をつかへ、略吉凶禍福を狐にまかする徒、まことに悲しむべし。金銀は野狐の細工に成るものにはあるべからず。略僧侶狐の力を假りて加持祈禱し、憑をたて、幣を揺かす、是這僧即狐の同類なり。釋迦如來一代の諸經に野狐の力を假て祈禱せよとありや否や。かりそめの病人をも人のうらみと名づけ、生靈の托しぞ、死靈がそひしぞとおどしかけて狐をつかふ。其僧心のとはいか答ん。經力にてさやうの事もいゆるならはば何ぞ狐の力をからんや。各その宗とする經までも人にいやしまれ、狐の力にて不思議をなさんとするは、狐よりつかはるゝといふものにて、人面獸心、それ

こそけだものより下につくべきものか。人としてけだものゝ下に列するさへあるに是をたのみて信する徒はけだものよりは二等下につくべきぞ(南嶺子四) 稻荷へ參詣し、狐を信仰し、茶根尼を祈るものは以て箴とすべきである。

最後に稻荷(特に伏見の稻荷)を鍛冶職を初め一切の金物商の守護神として、十一月八日に糶糶祭と云てお祀をする風習が徳川時代に行はれて、稻荷を糶糶の創始者であると傳へて居るが、取るに足らぬ俗説である、これは疑もなく三條小鍛冶の傳説から來たことであらう。

又一種の稻荷使ひと稱して飯繩使ひと云ふことがあるがあまり長くなるから飯繩使ひのことは茲では云ふまい。

倭論語に稻荷明神の宣託が出てゐる、全然佛敎的のもので、自らの惡神である魔神であることを極力辯護してある。曰く「諸人よ、鬼神天魔を嫌ひにくむこ

稻

荷

となかれ、大悲の心をおこして經多羅尼をよみさづけよ、假初にも是を降伏する思を成すべからず、濁れる衆生は惡きとて祈りしりぞくる故に終にねがひをみるはなし」と。

# 大黒天

一

印度の神々の中にシヴ(濕婆Siva)と云ふ神がある。三神と云つて梵天、シヴ、ヴィシヌを一神と見て、生成・破壊・保存の三方面の威徳を表はす大神の一と數へ、後世には印度教がシヴ派とヴィシヌ派とに分立して、一方は専らシヴを尊崇し、一方は専らヴィシヌの神徳に歸依するに至つた程の大神である。

シヴと云ふ名は印度神話の歴史中では最古からあつたものでなく、寧ろ吠陀時代ではルドラ(荒神)と云ふ名で通つて居た、と云つてもルドラ即ちシヴと云ふ風に變化して來たのではなくて、ルドラの名は火神アグニの別名となつたり、時

にはアグニと別神となり、その頃ではまだ單に神に捧ぐる讃歌の主、犠牲の主、療病の主として尊ばれ、畏るべき神としてよりも救済者と見られて居たのが、梵書時代になつて大自在天 Mahesvara 大天 Mahadeva と稱し、ルドラを稱して彼は梵天なり、シヅなり、インドラなり、ヴィシヌなりと云つた風に尊崇し始め史詩時代に降つて茲に初めて曩のルドラの神をシヅが代表してやや活動し來り、紀元七世紀には南印度に稱名なシヅの祀社が百もあつたと傳へルドラがシヅに變つてからは、先に云つた三大神の一地位を占め、専ら破壊神として神徳を發揮して來たが、印度の思想傾向として破壊それ自身が孤立して存在することは無いのでその裏面には必ず再生とか保存とかの片面が附隨してゐて、或時は三神の各一神がその一々の徳を司るとし、或時は三神中の一神が三徳を司るともするものであるから、一方に破壊神としてのシヅはルドラ、マハーカーラ Nirriti と名け

て畏怖的となつてゐると思ふと、一方では直ちに自在天とか大天とかの稱を得て全知全能を歌はれ、再生の神徳を發揚し、或はリンガ「リンガ」の形相で祀られることもあり、或はニールカント Nirakanta 即ち青頸と云ふ名を得て、遂には觀音の一化現、否、觀音それ自身なる青頸觀音として佛教中で祀られるに至つたのである。

シヅの神徳は後世多數の歸依者を得るに至つただけそれだけ多種多様になつたが、佛教中に大黒天として祀るものはその一化現なるマハーカーラ(大時)であるマハーカーラ(摩訶迦羅)は大時又は大黒と云つて、印度では生物の生命を奪ふものは時である、時の流の前には一切の物は變化を享け、或は生成し或は衰滅を餘儀なくせられると云ふ意味から來た名で、一般信仰の上では生命の掠奪者、萬物の破壊者と考へられ、現にエレファンタには忿怒形の像に現はされて居る。

ブラーナ時代に降つてマハーカーラの徳を解して時マリアを支配する者、不可避の時に對してもなほ自由にこれを左右し得る者と解釋し、マールカンデーヤが幼年の時、時の神カーラ即ち死の神に伴ひ去られんとしてリングのシヅを祈つたため、シヅはカーラハー (殺時者) と現じ、獐猛な相好をしてカーラを退治し、マールカンデーヤの死を救つたと作話してゐる。何れにしてもマハーカーラは不可避の破壊者をも撃殺する威力ある神と云ふ意味に外ならぬものである。

シヅ神の破壊力が如何に慘憺たる想像を作つたかを示すために更に茲にシヅの神性を説く必要があらうと思はれる。シヅは陪囉囉 Bhairava と現はれた場合には破壊それ自身を好愛する神性を發揮し、これが佛教中に混入した形式でもその修法は常人の想像外の獐猛さを保つて、先づ本尊を書くには勇猛正直の人の衣か婦人の下衣か産婦の穢衣かに、一身九面・裸形・黒色・三十四臂・十六足と云ふ異

様な形相を作り、この像の前に棄屍林の墓所の有様を畫き、墓所には囉利鬼神が集り、林の樹上と地上には處狭きまでに死屍の散亂した有様を圖畫するのである。扱修法をする人はこの本尊に向て裸體になり、頭髮を亂し、鬻腰を以て冠とし人の來ぬやうな靜かな所で、常に人肉を焼いて薰香とし、人骨の珠數を持つて祈禱し、又は縦まゝに酒食を取て斷食もせず、一日に三度人血を以て練た香を焼いて供養せよとあり (妙吉祥瑜伽大教金剛陪囉囉轉經) 天平時代に行はれた戰鬪の舞曲陪囉囉陣曲は即ちシヅのこの形相の舞曲で、後節に云ふターンダダの舞曲はこれである。

シヅは常に鬼魅の衆を率ひて棄屍林墓所を跳梁し、頸に毒蛇を繞ひ、鬻腰の首鬘を懸け、己に反抗する悪者を踏み、時に酒を痛飲し、酔に乗じて神妃カーリーと共にターンダダ Tandava (陰陽地鎮曲) と稱する亂舞に耽ることもある。



シヴの神格に就て、暴悪破壊の方面はこれでその一斑を知ることが出来ると思ふ、茲に餘談のやうではあるが、日本へ來てからの大黒の像に關係があるので、摩訶迦羅（エレファンタ Elephantia にある）と、通常のシヴの像と、リンがのこ  
とゝに一言して置かなければならない。

エレファンタの摩訶迦羅の像は一頭八臂の像で、人間・劍・血杯・鈴を四手に持ち、上二手に太陽を蓋隠さんとする覆蓋を排し、他の二臂は缺損して居ることである。西藏の像は一頭、怒髪、三眼可畏、六臂の形で、手には如意珠及び鬲腰杯等を持って居る、これは日本の像とよく似て居るが日本の像の根源（Gaulの説）となすのは早計ではあるまいかとも思はれる。

通常のシヴの像は種々の武器を持った三眼の像であるが、虎皮を繞ひ又は虎皮の上に坐し、一手に角を握りて鹿を提げ、一手に鉢を持ち、兩手を以て象皮を被



西 藏 の 大 黒 天  
一 一 二 頁 參 照

る姿勢をしてゐる。これは嘗てシヅが修行者に化して仙人の棲む林へ行つた時、仙人の妻等はシヅの美貌を見て戀慕の情を生じ、争てシヅに言寄たため、仙人等はシヅを邪魔者に思つて、相談してシヅを殺さうと企て、林の中に坑穴を掘り、神通力を以て穴から虎を飛出させたのを、シヅは忽ち退治してその皮を衣にし、次に鹿が角を振立て、走懸つたのを左手に掴み、次に仙人は熱鐵を飛させたのをシヅは事も無げに手に執つて鋒を作つたのであると傳へ、象の皮はガヤ(ガヤ)と云ふ阿修羅が神々にも負けない威力を得たことに慢心を生じて、修行者を殺さうとした時、修行者はベナーレスにあるシヅの社に逃込んだので、シヅは修行者を助けて阿修羅を殺し、皮を剥いで被布のやうにして今もなほ被て居るのであると云ふ。

リングガ Lingga と云ふのは男根の意味で、摩訶迦羅たるシヅの象徴に祀るもの

で、或は單にリングのみを祀り、時にヨーニ Yoni (女根) と結合した形で祀ることもある。

神話中には或時聖者等が會合して三神中の何の神が最高神かと云ふ議論をした時、ブリグ Bhrigu と云ふ聖者が總代になつて神々を見分して廻つた事があつたが、丁度ブリグがシヅの宮殿へ來た時、シヅは内殿に居て妃デーヴィーと共に戯れて居たので、侍衛の者は聖者を室外に待たせて置いて、何時迄待ても入れて呉れなかつたから、聖者は待草臥れて遂に怒つて、それ程妃に抱かれて居なければリングとヨーニの姿となつて人の尊敬をも供養をも受けるを得ぬ者となれと呪咀した。爾來シヅはリングの形で祀られると云ふ。然しリングの崇拜の起元とこの傳説の製作との前後は別問題として、兎に角シヅは摩訶迦羅としてリングの形で祀られ、有名な十二リングの一に摩訶迦羅と云ふ名のリングがウッヂャイン Diti だ

ミに あつたが、西歴一三二一年にアルタムシユ Mithras と云ふ回教徒の王のためにデーリー Delhi に持たれて破砕された事のあるに見、又シヅ派の僧が今もなほリングを頸に懸けて居るに見ても、その信仰が如何に古くから今に至る迄盛に行はれて居るか知られると思ふ。(日本や埃土のリング崇拜に關しては今論ずることをやめて置かう。)

神話の所傳が何と説明するにしてもリングはシヅの生成と破壊との象徴であることは疑念を挿む餘地は無いと思はれる。生成は生殖を意味し、破壊は嫉妬・不抵抗・處女性の斷絶を意味するかも知れぬ。と云ふとリングは他の國々……特に日本で……祀られて居る時のやうに何となく淫靡な滑稽味のある幼稚なものやうに思はれるが、印度に於てはシヅとリングとが結合する以前にリングの崇拜があつたとすれば知らぬ事、リングが即シヅとなつてからは、日本のやうに梅毒の神

様、下の病の神様たる浮氣稼業の女供の相手ではなく、嚴然たる威烈熾盛の神であつて、その形も更に象徴化して、單に一本の柱で示されたり、二根結合の様式でも皿か引臼に片口の付いたやうなヨーニの中から、リングとも云ふべき小柱が突出して居たり、柱の代りに白い卵形の石が載せてあつたりして、一見誰れもそれをリングと氣の付かぬものとなつて居る。

扱更さくまにこの摩訶迦羅まかから即ちシヅ、リングが佛教に傳はつて大黒天と呼ばれ、日本へ來ては茲こゝに惠比須えびすと共に福神の一對となつて婦女商賈ふぢやうかうの勸心くわんしんを買ひて得て湯仰たうやうを受けるに至つた經路けいろを辿つてみよう。

二

漢譯かんやくの經軌けいぎに表はれた摩訶迦羅まかから即ち大黒天だいこくてんも印度教いんどけう中の特質とくしつを傳へて破壊暴虐はくわいぼうぎやく

と生成施福せいじくとの二方面にふめんはあるが、一者しやそのまゝ、二方面にふめんを傳へたものはなくなつて經軌けいぎによつては或は荒神あらひの如く説き、或は施福神せふくじんの如く説いて、その功德くどくは一致してゐない。

仁王にのう經護國品けいごこくほんに班足王はんそくわうを惑はして食人鬼じやくじんきに化せしめた夜叉やしやを塚間つかま即ち墓所ぼじよに彷徨くわうわうして居る摩訶迦羅まかからと呼び、良賁りやうびの註ちゆうには「大黒天神だいこくてんじんは戰鬪せんとうの神なり、若しかの神に禮拜らいはいせばその威徳ゐとくを増し、事を舉あひて皆みな（優いゆう）勝しょうする故ゆゑに禱祀たうしするなり」とあるは軍神ぐんじんとして見たものである。

この種の記事は神愷じんがいの大黒天神法だいこくてんじんほふに引用いんようした孔雀王經くわんじやくわうきやうの説に「烏戸尼國うにこくの國城こくじやうの東とうに奢摩奢那しゃましゃなと名くる（棄き）屍林しりんあり、その林はやしの從横じゆうわう一由旬いちゆうじゆんに滿みつ。大黒天神だいこくてんじんあり、これ摩醯首羅まがいしゆら（大自在天だいじざいてん）の變化へんげの身みにして、諸もろの鬼神きしん（及びおよ）無量むりやうの眷屬けんじやくと共に常に夜間やかんに林中りんちゆうを遊行いぢやうぎやうす。（この神かみ）大神力だいしんりき有り、諸もろの珍寶ちんぼう多く、隱形いんぎやう藥やく

長年藥を(所)有し、遊行するに(虚)空を飛(行)し、諸の幻術藥を人と貿易し(その代物として)唯生きたる人(間)の血肉を(求)取り居たり。(その交換法は(豫め)先づ(血肉)斤兩を約して藥に買ふるなり。人若往て(幻術藥を得んと)欲せば、陀羅尼を以てその身を加持し、然る(後)往て貿易す。若し加持せず(して往か)ば彼等諸鬼神乃ち自ら形を隠して人の(持ち行きし)血肉を盗みて斤兩を減せしめ、(更に)かの(貿易せんとして行きし)人の身上の血肉を取り、取るに隨ひ盡るに隨ひ、先約に満たざる時は乃至は一人の血肉を取盡す。斤兩満たされば藥得べからず。若し加持せば寶貝及諸藥を買得て意の欲する所皆成就するを得。若し懺祀せんとするものは唯人の血肉を(以て供養すべき)なり。かの神大力ありて即ち人を加護し、作す所の勇猛鬪戰等の法皆勝を得るなり」と云ふのと同じで空華談叢三にはこの大黒こそ實類の大黒天で、専ら血肉を取食する鬼神の王とし

て、佛祖通載三五に元の世祖の時の事件として、天兵が南下したとき、襄城の居民が眞武に禱ると、筆を降して大黒神あり兵を領して西北に来る、吾亦當に避くべしと云つたが、將して敵を降し、常州と云ふ城を破つた時、多數の黒神が城内の家に入出入するのを見た。市民は誰一人これを知らなかつた。これ即ち摩訶葛刺神だとあるのを例としてある。

印度の節でも云つた如く、大黒は自在天即ちシヴの化現であることは言を待たぬものであるが、佛教中では大黒天法の別説に堅牢地天の化身だと云ふが、取るに足らぬと思ふ。(この半面には注意すべき事實があると思ふ。このことは後に特に述べるつもりである)又大日經疏十に大日如來が茶枳尼衆を降伏するため「降三世の法門を以て大黒神と化作し、大威力を具し、灰を以て身に塗」つたとあるが、これは大黒天が大日如來の變現であると云ふ意味ではなく、茶枳尼降伏

のために現はれた大日の方便身の一形と見たら良いだらうと思はれる。従つて印度の最大神シヴの化現とは云へ佛教中では地位は寧ろ下位に屬し、密教でも胎藏界には外金剛部に列し、一般淫祀と同列に寧ろ修法者の使者として三世最勝心明王經には「摩訶迦羅天の像前にて蘇末那を三甜（蘇蜜酪の種類）に搗し、護摩三洛叉（を修し）已れば現じて使者となり、一切を成辨す」とある。

大黒が軍神として祀られることはシヴの化現摩訶迦羅の破壊熾烈の徳を傳へた當然の結果で、この神徳を表す忿怒形の大黒天は

- 一に三世最勝心明王經の一頭二臂の像で「象皮を披、横に一槍を把り（槍の一頭に人頭を穿ち、他の）一頭に羊を穿つ」とある像である。
- 二に慧琳音義十に「八臂、身は青黒雲色、二手を懐中（腹の中央部の意）して横に一の三戟叉を把り、右の第二手に一（頭）の青殺羊を捉り、左の第二手に一



三面六臂大黒天  
一頁參照

餓鬼の頭鬚を捉み、右の第三手剣を把り、左の第三手に鬻體幢を執り、後二手各  
肩の上に共に一白象の皮を張りて披るが如き勢をなし、毒蛇を以て鬻體を貫穿  
して以て瓔珞となし、虎牙上に出で、大忿怒形をなし、雷電煙火を以て威光とな  
し、身形極大、足下に一地神女天あり、兩手を以て大黑天神の足を承く」とある  
のと、先に印度教のうちで述べたエレファンタにある摩訶迦羅の像がこれである  
三に大黑天神法にある三面六臂の像で、「青色、三面六臂、前の左右の手は横に  
剣を執り、左の次手に鬚を執て人頭を提げ、右の次手に牝羊を執り、次の左右  
の手にて象皮を背後に張り、鬻體を以て瓔珞となすなり」とある。

この三種の忿怒形の像に就て吾人が思ひ起すことは印度神話中に現はれたシヴ  
の形相で、羊と鹿とこそ變つては居るが、野獸の角を以て提けて居たり、象の皮  
を被る姿をした邊は面白いことだと思ふ。印度のシヴ神の性格を知り忿怒形の

黒天を見たものは大黒天が印度の破壊神シヴであることを疑ふ者は一人としてあるまいと思ふから、更に福神の大黒を觀察してみやう。

空華談叢三に「權類(の大黒天)は護法の善神」だとしてあり、鹽尻四十六に「二臂の者は冥福を祈るといへり」とあるが、後者の説は門外者の説だけに正確でない。現に三世最勝心明王經には、忿怒神の二臂の像が出てゐるから。施福神としての大黒天は南海寄歸傳一に出たものが最古であらう。「西方の諸大寺處には咸食(堂の)柱の側或は大庫(裡)の門前にありて木を彫みて形を表はす。(像の丈)或は二尺三尺、神王の狀をなし、坐して金囊を把り、或は然らざるものは小床に踞して一脚を地に垂る。毎に油をもて黒色に拭ふを形(式)とす。號して摩訶迦羅と云ふ、即ち大黒神也。古代相承に云ふ、これ大天……シヴのこと……の部屬にして性三寶を愛し、五衆を護持し、損耗せしむるなく、求むる者情に稱ふ。

但、食時に至れば厨家毎に香火を薦め、所有飲食随つて前に列す」とあり、佛が涅槃經をお説になつた般禪那寺には常に百餘人の僧が居たが、或時不意に五百人の客僧が來たが食事の用意などは無いので皆々困却して居ると、信者の老婆が側から思ふ仔細があるからと云つて、急いで香火飲食を大黒天に供へ、四方の僧衆が今大聖釋迦牟尼世尊の靈迹を參拜するために俄に寺へ來た、幸に満足に飲食供養の出来るやうに加護し給へと云つて、百餘人のために用意した寺の常食を出して次第に分配して行くと、六百餘人の僧衆が平常の如く満腹することが出來たとある。

この摩訶迦羅の像は形相は分明して居ないために種々の推察が加へられて、聖天の本身であるガネーシャが又臺所や厨房に祀られること、ガネーシャも亦大自在天の變化と考へられて居る點、及びシヴが女神カーリー(神妃デーヴィー)即ち



烏摩妃と附隨した點と毘那夜迦の双身なる點から、この摩訶迦羅をガネーシヤ、即ち聖天ではあるまいかとする者もある。そしてガネーシヤの像は大概片足を台の上に屈けて片足を垂れて居る點まで似てゐるからである。自分の意見としては印度に當時は忿怒神以外にこのやうな施福神の大黒天があつた事と見て置くが至當と思ふ。

神體の大黒天神法の中に、大黒天に關する諸説を引用する前に、最初に不思議な大黒天を出して居る。精細に觀察する必要があると思ふので原文のまゝ出してみやう。

「吾體作ニ五尺。若三尺若二尺五寸。亦得ニ通免之。膚色悉作ニ黒色。頭令冠ニ烏帽子。悉黒色。令著袴。驅不垂。令著ニ狩衣。裙短袖細。右手作拳。令收ニ右腰。左手令持ニ大袋。從背懸ニ肩。其袋之色爲ニ鼠毛色。其垂下程餘ニ臂上。如是作畢。居ニ

大衆食屋禮供者。堂屋房舍必自然之榮。衆集涌出」

これがその本文である。讀者が最初注意を呼ばれることは烏帽子、狩衣の二語であらうと思ふ。支那に烏帽子狩衣と云ふ物があつたであらうかと疑つて見ると最初の「吾體」と云ふ書出しからして怪しく、「得通免之」も亦經軌の語法としては如何がはしく、目まぐるしいまでに使役動詞の令を用ひたことも亦精練を缺いたもので、到底支那人の書いた漢文とは思はれない。

更にこの儀軌に對しての不審は大黒天の本地を堅牢地神としたこと、著者神體の時代も知らなければ事跡も不明であること、前段に施福神を出した箇所と後段の忿怒神を説いた箇所との不統一な點とである。これは斷じて日本製の書であらう。或る學問僧が當時天下に流布してゐる大黒天を擔ぎ出して、寄歸傳あたりから思ひついて「若吾安ニ置伽藍。日々敬供者。吾寺中令住ニ衆多僧。毎日必養ニ千

人之衆乃至供人授與世間富貴乃至官位爵祿應惟悉與焉（ヲオモフモノ）などと云つて世人の歡心に投じたものであらう。であるから神體の大黒天神法の前半は支那傳の大黒天を説く上に何等の權威にも値しないと見て差支ないと思ふ。

大黒天は日本では福神として傳へられただけに世人の尊敬を得た事も多く、隨て妄説を述べて世人の僥倖心を誘惑したことも屢あつたとみえて疑經と思はれる經軌は外にもある。織田師の辭典には佛說摩訶迦羅大黒天神大福德圓滿陀羅尼經、摩訶迦羅大黒天神所問經が疑經として擧げてある。

三

日本に傳はつた大黒天は俗間には全然施福神となり、疑經大黒天神法の初段にある像のやうな烏帽子狩衣を被、福の小槌を持ち、財囊を負ひ、俵を踏んだ形で

ある。その除外例は正傳の密教の忿怒形と天台の三面大黒と佛像圖彙にある六大黒である。佛像圖彙の比丘大黒、王子大黒、信陀大黒等は怪しいもの、摩訶迦羅大黒女はシヅ妃の暗黒神カーリーを意味し、夜叉大黒は鬼魅の將たるシヅを指し第六の摩訶迦羅大黒は諸經所傳のものであらう。

天台の三面大黒はこれも亦多少怪しいもので、傳によれば、傳教大師が比叡山を開く時、下方の空中から一老人が現はれた、これ即ち堅牢地神であつて、その像を刻して山門の守護神としたとある（溪嵐拾葉集）一説には傳教大師の所傳ではなくて、叡山の天台が密教に影響をうけて亂れた後の製作だとする説もある。

この大黒天は三面六臂で、軍神忿怒神の大黒と趣を異にし、大黒、毘沙門、辯天の三神合體である、或はシヅの破壊を毘沙門に表はさせ、施福生成を辯天に示させて、中央の大黒にこれを合一させた意味かも知れないが、この大黒も日本俗間

の大黒の如く囊を負ひ槌を持ち米俵を踏んでゐる邊は餘程眉唾ものである。これは又更に後節で點檢しやう。

今俗間に作られてゐる大黒は信賴すべき經軌に載つてゐないことは斷言出来るが、何處から來た形像かと云ふ事、何者の創始になつたかに就て明確な説を發見することは可なり困難である。

その本據が無いためかして、烏帽子狩衣の大黒にもその持物に就て多少異説はる。鹽尻五十三に「大黒天神、頭に帽を蒙り、右の手槌印、左手囊を執る、荷葉に乗せしむ、槌に作り、たはらにのせ、日本の頭巾を蒙る、布衣やうの服を着せしむ、非也」とあるは修法者が勝手に作意して尤らしく蓮葉に乗せてみたり、(疑經大黒天經所説)槌印など云ふ言葉を作り出したものであらう。倭訓栞にも亦この様式の大黒を説いてその起原する所として「摩竭持槌 飢渴持袋」と

いへば二鬼を合せたる也」としてゐる。普通の俗間の像は頭巾を冠り、槌を持ち、囊を負ひ俵を踏んだ像であることは人も知る通りである。

この種の大黒が何處から來たかは想像に訴へて決する外に道はない。

神道家の傳ふる所によると大黒天とは大國主命であるとしてゐる。一應もつと

至極のことである。神道アコー

にて大黒の像をつくると、  
作ること附會説をなし、次下に「今世に用ふる所の形像は日本神道（ニッポンノカミチ）にて天竺の大黒天神にはあらず、とりちがへたるものなり。いかさま形像の體、日本（ニッポン）の人の装束めきて天竺姿とは見えす。則すなはち惠美酒神と父子にてますよし」とある。要するに神道家風の説は大概大黒即ち摩訶迦羅と日本の大黒とを別物として取

扱つて居るが、佛家の説なる眞俗佛事編には「石山口訣等には大黒天の像、寄歸傳の説を取れり。雖然權化眞作の大黒天神の像今の世流布の像に同じ、是又據どころ有べし、明師に就て尋ねべし」としてこれを和會してある。

今探究しやうとする問題は日本の大黒が將して大國主命を指したものであるや否やから決定してかゝらなければならぬことゝなつた。以上列記した所によると或は同一論が勝を占めさうになつて居るが、さて日本に大黒天の信仰が傳はつた以前に大國主命を大黒として祀つた例證があるかと尋ねて見ると、同一論は甚だ怪しくなつて來る。大國主命を祀つた出雲大社は大黒神とは呼んで居なかつた。平安朝以前に大黒の名を見たことはなかつた、吾人は傳教弘法が今日世に流布して居る俗間の大黒或はそれに似たものを作つたと云ふ説をも疑ふものである。平安朝の初期の神怪な記事を滿載した日本靈異記に大黒に關する記事の無い

こと、今昔物語にさへその名の現はれず、その施福の徳に關する記事の無いことを以て見れば、大黒が世人の信仰を得來つたことは源平時代頃からとしなければならぬかと思はれる。勿論それまでに密部外金剛部の忿怒形の大黒天は世に知られて居り、三面大黒は天台の宗徒の間に幾分尊敬せられて居たに相違は無いが。

日本流の大黒が平安朝の末期頃に創始されたものでないかと云ふ見當を付けて見ると、茲に又面白い點がある、と云ふのは、藏經中にある大黒天の記事中、先にあけた神體の大黒天神法中の大黒は唯一の根據とすべき日本風の大黒であるがこれに就て疑經であることは先に一言した、該書の奥書に承安三年醍醐寺で書寫した由が書いてある。承安三年と云へば高倉天皇の御世で平家全盛の時代である。して見ればこの大黒天の像法は承安年間より餘り遠からざる時代の創製とすれば

烏帽子狩衣の言葉にも附合して來るのである。更に該儀軌の初めに「有人云大黒天神堅牢地天化身也」と云ふ如き更に經軌に根據を持たない記事を得て來たり由も自然分明する。これは天台の三面大黒が地神の出現だと傳へた説を假りて來たものに相違ない。

天台の密教即ち台密は大黒を世に流布した最初の派らしく思はれる。天台のあるものが、宗祖傳教の事跡に三面大黒を結付け、三面大黒の中尊のみに合一した大黒が世に行はれ、次第に大黒の名が高くなるに伴つて佛家が又これを鎮護道場の神、土地守護の神と云ふ邊から大國主命と一致せしめ、一實神道や唯一神道の立場から出發して大黒に異装を扮はしめ、徳川期に入つて復古的神道者流が強い大黒を日本在來の神とせんために説を立て、大黒は大國主命である、印度の摩訶迦羅とは別神であるとし、遂に眞俗佛事篇にある「大黒は天竺の神に非ずし

て大己貴の像なり、略地主神にして、福神に之れを崇む」とまでの固執した世儒の説を生じたのであるまいか。

伊勢貞丈が安齋叢書に云ふ如く、大國主命が笑を好み槌を持ち俵を踏みしを見ず、大頭巾を冠つた記事も見ない。皆妄説であるとしたことは卓見である。

さて今の大黒が印度傳來の大黒で無く、大國主命でも無いとすれば何に起源するかに就て究めなければならぬ。

何の證據もないので、一見非常に獨斷的偏見と見られるかも知れないが、思ふに渡唐の密教者が印度のシブ神の面目を傳へ歸つて、日本流の三神の全體を作り更に轉化してシブの象徴たるリングに模して創始したものが日本の現在の大黒天ではあるまいかと思はれる。

三面大黒中の毘沙門と辯天は印度の神シブとカーリーとを當時日本で信仰を得

て居た二神に置換したものであらう。毘沙門は日本でこそ軍神であるが印度では福神である。辯天は一時シブの妃たりしこともあり、時にはカーリー即ち吉祥天と混同する事もある。當時日本には軍神・破壊神・暴惡神・威烈神としては毘沙門が最も勢力を得、施福神・與樂神としては辯天が廣く行はれてゐたのを假り、それを兩側に置いてシブ即ち摩訶迦羅なるリングを置いて生成破壊・自在無礙・福徳圓滿を象徴としたものであらう。

何故にリングの大黒に袋を負はせ、米俵を踏ませ、妙な格構をした頭巾を冠らせたかに關してはリングの一面に福神に相應するやうな物を刻付けてたとするが至當であらうと思ふ。この方便主義は自然形像の不定を意味し、袋囊、頭巾、烏帽子、狩衣、布衣などと異論を生じた所謂である。現に上野の不忍辯天の小島にあるリングはこの形式を執つて、或は地藏だと云ふがその顔付や頭巾を見てはどうし

ても地藏とは受取れぬ不可思議な神で、その形相の上からは何人もその本質を決定することは出来ない程に出来上つて居ることも當然のこと、解せられ、廣隆寺牛祭の祭文に「辻々の道祖の神、家々の大黒天神の袋持に至るまで驚かして而白さく」として、道祖神即ちリングガと大黒天神とを一例にした事由も明白になる次第である。かく見て來ると一時世に在たと云ふ蓮の葉に乗せた大黒は、今印度に行はれてゐる二根結合のリングガに似、俵に較べれば蓮の葉は一層ヨニー台に似通つて居たであらうとも思はれる。

現今日本の大黒は口邊に血を滴した猛烈なシヅの功徳、碎破暴逆の性を失つて専ら再生保存の徳の方面を現はし、寄歸傳の摩訶迦羅の如く、神棚又は勝手棚の隅に祀られ、リングガの形式に異様な服装を刻まれ、生殖繁榮の神として我利我利盲者の渴仰を得てゐるのである。

大黒飛磔法と云ふ修法は榎の枝を以て蕎麥と麥、即ち寶珠の形を作り、これに各種の修法を行つて自分の羨望してゐる有福者の家の中へ投げて置くと、有福者の福德は自然に修法者又は呪物を投込んだ者の身に流來ると教へてある。勿論取るに足らぬ妄説であらうが、その行爲の動機は全然詐欺強盜と一類である。リングガはかゝる惡輩の渴仰を享けるに相應したるものかも知れない。

四

大黒天の本質を明かにする點はこれで盡きたと思ふが、茲に餘論としてその別説の摩多羅神のこと、及び二三氣付いた事を記して置かう。

このことは鹽尻四十六に「就中三面六臂の相あり、略亦摩多羅神と稱す。中摩多羅是は女なり、諱は(?)諸天に七母神、鬼神と化して役を行す、故に密家摩多

羅神の修法して疫病をはらふ秘法あり、我國摩多羅神幟頭を蒙り鼓を擊容なり、三輪大黒の像も、六臂の内その本手は鼓を撃つ右様なり。然れば摩多羅と大黒一體なることしるし」とし、空華叢談三に「その神像のありさま頭に唐制の幟頭を蒙り、身に和様の狩衣を着て、左の手に鼓を取り、右の手にて之を打つ姿なり、左右に童子あり、風折烏帽子を着て右の手に笹葉を持ち、左の手に茗荷を取て舞へるありさまなり、中尊の兩脇にも竹と茗荷とあり、頂上には雲氣あり、その内に北斗七星を畫けり」とし、書中次下に他書を引いて、羅山文集三十七に、摩多羅神を一に金毗羅と云ひ、二童子の名を出し、神の因縁を説いて傳教が入唐して天台に居たとき、この神が顯はれ、傳教と共に日本に來ることを告げ、秘法を授けたと記し、更に羅山詩集六を引用して「傳稱す最澄入唐の時、金毗羅神體頭に現じて曰く、我汝を護りて風帆恙なからしめんと、歸朝して此神を祈祭す、一

に摩多羅神と名く、即ち大己貴神と一體なり。山王も此の神を配す、故に台徒これを信仰せざるなし」との記述を擧げ、途方もなき僻説としてゐる。

元來摩多羅神は墮落時代の天台僧の創始で、密教や禪宗の隆盛を見て羨望に耐えなかつた惡者共が、玄旨歸命壇の灌頂と云ふことを始め、眞言の修法と禪の公案に類したことを創めた時の本尊で、根據のあるもので無い。現に羅山文集に傳教を摩多羅神の始祖とした説があると思ふと溪嵐拾葉集には慈覺の創始として「覺大師大唐より引聲念佛御相傳ありて歸朝のとき、船中に於て虚空に聲あり、告て曰く、我を摩多羅神と名く、即ち障礙神なり、我を崇敬せざれば往生の素懷を遂ぐべからずと云へり、仍て常行堂に勸請せらる、略摩多羅神は摩訶迦羅天これなり、またこれ茶根尼なり」とある。

鹽尻に摩多羅を女天だとした事は面白い、摩多羅は梵語の母の義であるから女



神かとも思はれぬでも無いが、形像は丁度三河萬歳の出来そこないのやうな男神である。これを諸書で金毗羅大黒などと結びつけて俗輩の喜びさうなことを列ねた邊は、寧ろ一笑にも値しない。空華叢談はこれを論じて「これ末々の愚輩の作り出せし事と見えたり。略大凡そ山門中古其法大に亂れて玄旨歸命壇の灌頂と云ふ事を略最極祕密の傳法と思へり、略途方もなき僻説なり」と斷じてある、摩多羅神の荒唐附會は論を俟たぬとして、その大黒と見られた理由は異様な装束にあること、摩多羅それ自身の因縁の附會に窮した擧句の惡戯に外ならぬとして捨て、可いと思ふ。

大黒の修法には聖天の油に於けるやうに米を用ひるのが通常になつてゐる。これは説を立てる者は或は大國主命が五穀豐熟の國土の神であるからだとか、一日も缺くべからざる米を最大の寶として俵を踏ましめたと同じ因縁によつたと云

ふが、恐らくは平安朝に行はれてゐた散米の風を採つたのであらうと思ふ。平安朝では邪鬼、特に産時の障礙をする魂魅を降伏退治するために米を撒いたもので現に今昔物語十七にもその記事がある。降魔破壊の神たる密教の大黒天の修法の時邪鬼を拂ふために借りた米が、そのまゝ施福神の大黒にまで及んで米俵となり、茲にヨーニの地位を占めたかも知れぬ。

甲子に大黒を祀ることも古くから行はれて居る。これは施福、發生、繁榮の神と云ふ所から陰陽道風の計日法の第一日、干支の始めに當る甲子の日を選び、次で子より鼠の使獸の思想が出たことであらう。大國主命に鼠が因縁があること會通する者があるが、疑はしい。(聖天の本體であるガネーシャが鼠を使にして居るその鼠が今は大黒の使獸になつた。聖天の社の幕や提灯に双股大根が畫いてあるが、大黒が双股大根を負つた繪もある。兩者は大分混同して居るらしい。共にシ

ヅ神に根據を持た惡神で施福神である邊で混同したものとみえる)

これを要するに大黒は野蠻人の信仰を傳へたものであつて文明人の崇拜に値しない神である。人々は金を欲しがつて徒に他人の富を羨望嫉視し、リンガたる大黒を祀り祈るよりも、各人は意を用ひて自己のリンガを尊敬守護してその浪費と亂用とを避けたならばその徳は自然顯然たるものがあるであらう。

### 鬼子母神

鬼子母神は多く單稱日蓮宗の寺院で祀り居る神で、俗間では安産守護の神となつてゐる。これも亦印度の夜叉神の歸佛したもので、單に佛法を信奉する鬼女に過ぎないものである。

過去の世この世界には未だ佛の出現なく、ただ獨覺が居て寂靜の生活を送つた時、世人はこの獨覺を供養することを唯一の功德福田と考へて居たのである。或時この獨覺が世間を遊行託鉢して王舍城へ來た。丁度その日城内の五百の市民が各自晴衣を着、飲食物を持寄り、公園へ集つて大宴會を開かうと云うので、大騒をして來かゝる途中に、一人の懷妊した牧牛女が酪漿の瓶を提て來るのに出逢

つた。五百人の市民等はこの女を見て面白半分はその女に仲間へ入つて自分達と共に踊れと誘うと、女もつひ浮氣つほい調子になつて懐妊の身をも顧みず、眼を挙げ眉を揚げて人々と共に亂舞したが、あまりに疲勞した故か遂に其場に倒れて胎兒を流産した。

五百の市民はこの有様を見て、誰あつてこの無智な可憐な女を勞らうともせず興ざめ顔に急いで林の中へ行てしまつた。後に残された女は苦しさに頼杖をついて憂悶えてゐたが、やがて通りすがりの商人を頼んで持て居た酪漿と菴沒羅の實とを交易して貰つたが、さて立上る事も叶はぬまゝに其處に坐つたまゝ困果てゝ居ると、丁度その路を先に云つた獨覺が通りかゝつたのである。女は獨覺が威儀を正して如何にも取すました落付のある様子をして來かゝるのを見て、今の自分の苦しさ頼りなさを救うてくれる人を見付けたやうに喜んで、何の猶豫もなく

前に置いた五百個の菴沒羅果を獨覺に供養し、身を起して獨覺の足に額を著け、敬意を表して禮拜した。

獨覺と云う者は靜かに大自然を觀察し、人生を悟つては居るが、たゞ自分の悟のうちのみ住でゐる小さい佛で、その悟の内容を人々に説教して共に佛道へ導くことをしない者である。云はゞ自己の修行以外には何事もしない佛であるので女の供養とそのやるせない歸依に對して忽ち身を變じて雪白の大鵝鳥となり、翼を張り、虚空に舞昇つて神通力を見せた。牧牛女はこの不可思議の奇蹟を見て一層信心を起し、身を地に投げ、合掌禮拜した。如何なる頑迷愚痴な人間でも眼前に不可思議の神通變化を見れば、大木の倒れるやうに、突然力強い信心の起るものであるが、この無知な牧牛女も亦この時深い感動をうけは享けたが、生得の惡念に誘はれたものか、偉大な覺者に布施供養した功德によつて來世は王舍城中に

産れ、自分の不幸を見捨て行つた人々の子孫を食盡さうと云ふ大悪願を起したのである。

その事のあつてから幾時代か過ぎて後、茲に婆多と云ふ夜叉神があつた。常にその國の王なる影勝王を始め王妃宰相庶民を守護し、四時の氣候の寒暖、晴雨を調へたので、自然國內は五穀豐熟し、四方の國人は皆影勝王の都へ集つて來た。この頃北方の建陀羅國にも半遮羅と云ふ夜叉神が居てその國の人々を守護して居たので、建陀羅の國內は王舍城にも劣らぬ程よく繁盛してゐた。

この二人の夜叉神は互に親交を結び、時々會合して居たので、或時自分達に子供が産れたらそれを夫婦にしやうと約束をして置いた。やがて間もなく王舍城の婆多の妻は容貌端嚴の女兒を産んだ。その産れる時夜叉の眷屬が大喜びをしたと云ふので歡喜と名けた。すると今度は建陀羅の方の半遮羅の妻も亦男兒を産んで

半支迦と名けた。かくて二人の夜叉神は兒女の結婚の日の來るのを待て居るうちに、婆多の妻は又一人の男兒を産んだ。その母胎に宿つた時も産れた時も山嶽鳴動の奇瑞が現はれ、大象の咆哮するやうな聲を擧げたので、兒の名を婆多山とつけた。

婆多山が可なり成長したとき父の婆多は死んだが、婆多山は立派に父の後を繼いで夜叉眷屬の王となり、やはり王舍城の人々を守護してゐたが、一日姉の歡喜は弟に、王舍城内へ行て人間の赤兒を食ひたいと云つたので、婆多山は驚いて、自分達の父婆多は長い間この城民を守護してゐた。その後を繼いだ自分は勿論父の遺志を體してこの國を防禦し、萬一外部から浸害する者があればそれを追退けなければならぬのに、今この悪心を起すとは以の外であると姉を誡めたが、窺に思ふに、この様な姉を手許に置くよりは一時も早く許婚の半支迦に嫁せたが得

策だと云ふので、早速半遮羅とも相談して姉を建陀羅へ遣つた。

歡喜は半支迦の妻になつて以來、二人は仲よく日を送つて居たが、年月を経るまゝに過去の深い業因に誘はれて、時々王舎城民の嬰兒が食たいと云ひ／＼したその度毎に夫半支迦は種々に言慰めて居たが、そのうちに歡喜は五百人の兒の母となり、自己の豪盛を恃んで日々に不法な行爲をなし、遂には夫半支迦の諫止をも聽かず、王舎城中へ來て隨所に出没して手あたり次第に人々の兒を取つて嗜食して居た。

王舎城民はこのために大騒動を初めた。國王は命令を出して四方の城門の守備を嚴重にし、兵士は夜の目も寝ずに嬰兒を盗む者を捕縛しやうとしたが、盜賊の姿さへ見ることが出来なかつた。夜が明けて見ると、何時の間にか市民の愛兒の姿が見えぬやうになつて居た。市民は所置に窮して占卜者の指揮に隨つて飲食香

華を辨じ、街衢を裝飾して祭祀を行つたが、夜叉の心を慰めることが出来なかつた。

すると或日王舎城の守護神が夢に現はれて、佛の方便に頼る外この災厄を免がれる道は無いと諸民に教へたので、王舎城の住民は相共に佛の前へ來て事情を陳べて、夜叉女を調伏することを願つた。

佛は王舎城の住民の願を聞いてこれを憐み、明朝乞食に出られた時、夜叉歡喜の住處へ來られると、丁度夜叉女は外出して家に居なかつたから、夜叉女の末子で愛兒と云ふ名の子供をそつと鉢の中へ隠してお歸りになつた。

夜叉女は歸つて見ると一番可愛がつて居た末子が見えないので、驚いて方々を尋算めたが、遂に發見し得なかつた。夜叉女は悲歎して胸を打て叫び狂ひ、涙を流して泣き悲み、精神も混亂するまでに騒廻り、自分の住家の邊から王舎城へ來

て市民の家々は勿論、庭園から池の中まで尋廻つたが、矢張り愛兒の行衛が解らぬので、遂には眞の癡狂者となり、肌もあらはに衣を亂し、愛兒の名を呼びながら、上は天界から下は地獄に至るまで所有る世界を彷徨した。

多聞天の玉毘沙門は自分と一類なる夜叉女が狂氣して騒ぎ廻つて居るのを憐んで、一日夜叉女に教へて、世尊にお願すれば愛兒の行衛が知れると告げた。夜叉女は毘沙門の教を聞くや否や、忽ち下界へ来て見ると、世尊は其處に多數の弟子に圍繞せられ、圓滿の相好をして、宛も寶玉に輝く山のやうに、寂然として坐つて居られたので、心に歡喜を生じ、既に愛兒を發見し得たやうに喜んで世尊の前へ来て敬禮した。

夜叉女歡喜はさて世尊に向て、長い間子供に別れて居るので心淋しくて、日夜臥しも寐ないでゐる苦しみを救濟して戴きたいとお願した。佛は、汝は全體何人

子供を持つて居るかとお尋になると、五百人ありますと答へた。それでは五百人もある内の一人位が居なくなつたとて、さ程悲しくも無い筈だがと仰しやると、私は一日でも子供の顔を見ないで居ますと熱血を吐いて死ぬ程に苦しく思ひますと答へた。

世尊は徐に夜叉女を訓誡して法をお説になつた。それを見よ、汝は五百人もある子供の中から僅に一人だけ盜まれてさへそれ程迄に悲歎にくれて居るでないか、況てや人間がその一人子を取食はれた時の失望と悲歎とは如何程であらう、汝の悲しみに較べれて何百倍に當る筈である。可愛い者には別れ、憎い者に達ふ苦痛を理解し、これを免がれやうと思ふならば、速に佛法の信者となつて戒法を受けよ。汝が今日までの惡行を後悔し改心して佛法の信者となり、一切の執著愛念を去つたならば、立ろに愛兒に再會することが出来るであらうと。

夜叉女歡喜は世尊の言葉に順つて回心して佛に歸依し法に歸依し僧衆に歸依した。今迄見えなかつた愛兒が其處に忽然として現はれた。

扱世尊は歡喜に致へて、以後佛弟子の聲聞等が食事をする時、最後に一皿の食を調へて汝と五百人の兒等に與へるから、爾來それを食ふことにして人間を食つてはならないと禁ぜられ、歡喜はこれをお受けしたので、更に心を用ひて僧堂等を守護して衰損せぬやうにせよと命ぜられた。

これが毘那耶雜事三十一に出てゐる鬼子母神の歸佛の因縁である。鬼子母經にもこれに似た因縁がある。

鬼子母神は又訶梨帝母 毘梨三と呼び、種々の漢字を當て、暴惡とか黄色とかの譯があると傳へてあるが、これは今探究する必要はない。

鬼子母神の像は大樂叉女歡喜天并愛子成就法に天女の形を作り、極めて殊麗な



鬼子母神

らしむ。身は白紅色にして天縷(きぬ)の寶衣(ほうい)を著け、頭に冠(かんむり)を戴き、耳璫(みみたま)を飾り、白色の螺貝(らはい)を釧(くん)となし、種々の瓔珞(やうらく)を以てその身を莊嚴(しょうげん)し、寶宣臺(ほうせんたい)に坐して右足を垂下(すく)す。宣臺(せんたい)の兩邊(りやうへん)に膝(ひざ)の傍(かたはら)に各二孩子(がいし)を畫(え)き、その母左手(ははだて)をもて懷中(くわいちゆう)に一孩子(がいし)を抱(いだ)く、畢哩孕迦(びりえいげ)と名(な)け、極めて端正(たんとしやう)ならしむ。右手(うし)は乳(ちち)に近(ちか)づけ、掌(てのひら)中に吉祥果(きしやうくわ)を持(も)つ。左右(さゆう)に并(なら)びに兒女眷屬(ぢやうにんせんじやく)を畫(え)き、或(ある)は白拂莊嚴(はくはくしょうげん)の具(ぐ)を執(と)らしむ」とある。勿論(もちろん)異(こと)な形式(けいしき)のものもある様(よう)である……現(いま)に中山(なかつま)の法華經寺(ほっけやうきんじ)のは鬼形(きぎやう)の立像(たつざう)だと云(い)ふ……が多くはこの様式(やうしき)のやうで、寄歸傳(ききでん)一(いち)にも母(はは)が一兒(いち)を抱(いだ)き、その膝下(ひざかた)に三人(さんにん)又は五人(ごにん)の子供(こども)がある像(ざう)を出(いだ)してゐる。

後世(こうせい)になつて出來(でき)た次第法(だいはい)に依(よ)らず、たゞ愛子成就法(あいしじゆうほう)に依(よ)つて修法(しゆほう)の式(しき)を見ると修行(しゆぎやう)の功(こう)を積(つ)んだ人が吉日(きじつ)か日月蝕(にちげつじやく)の時(とき)を擇(えら)み、居常(きよじやう)に燈火(とうか)を用(もち)ひず、念誦(ねんじゆ)の時(とき)も眞暗闇(まつくら)の中で如法(にょほう)に鬼子母神(きしもじん)を供養(くぐやう)し、千八十遍(せんぱちじゅうはちへん)の護摩(ごま)を修(しゆ)し終(ま)ると、その時(とき)



鬼子母神の現身を見るか、大地が震動するか、光明の輝き渡る奇瑞を見る。その奇瑞が現はれるとその人は鬼子母神の修法を成就した人で、その人は鬼子母神の力によつて紛失物を發見し、高貴の人に取入り、女に好かれ、疑はしい事を明了にし、鬼魅を殄ほし、悪人を病に罹らせ、夫婦を和合させ、中毒を癒し、囚はれて禁固せられて居る者を解放し、論議に勝ち、女子には良き婚を與へ、遠方に居る可愛い人を側へ來させ、貸金を取立て、物怪の病を治し、一切の病を去り、難産の治癒などが自由に出來ると勝手な事を羅列し、訶利帝母眞言經にも亦神の功德として安産懷妊を初めとして、他人に好かれ、口舌の難を留め、新衣を得、惡夢を止め、聰明智慧福德の子を得、長壽ならしむる等一切の事を意の如く成就するとある。

斯の如く人を馬鹿にしたやうな事を麗々しく列べ立てるのは密部の經の通例で

丁度此の頃の雜誌に奇術魔法などと廣告を出して無智な愚人を釣る商人と同じ性質のものであるから、何を書かうと坊主の勝手ではあるが、茲に問題とすべきは鬼子母神は日蓮宗の寺で云ふ如く果して産婆であるかどうかと云ふことである。佛經中で最も古いとせられてゐる阿含經中増一阿含二十二には「諸の鬼神王及び鬼子母を降伏す。彼の如きは人を嘔ふ鬼なり」とある。鬼子母神は食人鬼である。この障疑神は一轉して歸佛せしめられて護伽藍神となつた。「四天王の衆」(寄歸傳一)として金光明經の聽聞者を擁護し(金光明經三)法華經の持者を守つた。成就法にも世尊は未來世中我が諸の弟子は汝の守護によりて悉く安樂ならしめよとお命じになつた。そして成就法の結段の付囑に「汝等我法中に於て、若は諸伽藍出家弟子の所住の處(及び)一切の人民を、汝及び眷屬は心を勤めて守護し、諸の惡鬼神をしてその障難を作さしむるなくして安樂を得しめ、乃至我

が法のあらん限り臆部州に於て應に是の如く行ふべし」とあるのが鬼子母神の面目を發揮した頂點であらう。

鬼子母神は食人鬼の夜叉女が佛法に歸依したと云ふだけで、佛法中には何の權威をも持たない小神である。當に別に淨室に置きて極めて慎んで(秘)密にすべし佛堂精舎中にも作法するを得ざれ、成就し難きを恐るればなり。又人をしてこの像を見しめ、或は作法を知らしめば、必ず効驗を失はむ」成就とまでに人に隠れて居なければならぬ神であり、佛殿にさへ置く資格の無い神である。さればこそ成就法にこの神の修法をする者が金剛部の眞言を稱へ、金剛部の念誦を修すれば失効すると云ひ、又自己の怨む人を祈り降伏する時、その怨まれて居る人が金剛部の法を誦し、又は佛の禁戒を持し、佛法に通達して居る人であつた場合は、その呪咀は忽ち呪者の身に反撥し來つた自身を惱亂するに至るとある。以てその弱小

な神たるを知るに足ると思ふ。

鬼子母神は先に牧牛女であつたのが夜叉女となつても食人の業力に誘はれたと同じく、歸佛後も亦夜叉の性質を捨てることは出来なかつた。修法に日月蝕の時を擇んだり、燈火を滅したりするやうに夜の世界が好だつた。そして道教の人の云ふやうに桃の木を以て云々せよとか、外道の修法のやうに鬪鬪を取て云々せよとかと教へた所が成就法にある。

産婆としての出處は寄歸傳に「疾病ありて兒息なき者饗食をこれに薦むれば咸皆願を遂ぐ」とあるから、義淨三藏の時代には既に印度で行はれて居たことと思はれる。成就法には先に列記したやうに安産守護は功德の最末に擧げてあるが眞言經に至つては全然これをお産の神様として「若し女人ありて男女(を産む)に宜しからず、或は胎中にありて墮落し、緒を斷ちて收まらず、四大男女(を産む)

に宜しからず、調適せざる、或は鬼神に諸の障難を作され、或は宿業の因縁に依て男女(を産む)に宜しからざる時」は鬼子母神の像を作りて修法し、女人が男女(子)を得んと欲せば月経後潔浴して」如法に修法すると七日にして胎子を得などとある。

これは鬼子母神が五百子の母であると云ふ點から來た考で、多分は鬼子母神の本性ではあるまい。五月雨やおしめに困る鬼子母神と云つた川柳子のやうな人々が昔の印度に居たら、恐らくは鬼子母神を洗濯の神様にしたであらうものを。

日本の記録のうちで鬼子母神に祈つて子を授かつたと云ふ傳説はあまりきかないやうである。安産の祈禱をしたことも徳川氏以前には見當らないやうである。たゞ盛衰記にある治承二年中宮建禮門院のお産の時の祈禱に、某の法親王を初め天台の座主までが清盛の威勢の下に参集して安産の修法を行ひ、高僧は思ひ思ひ

に様々な神佛を勧請して種々の修法を行つたうちに、六字、訶梨帝と列ねてあるのが一所見當つたのみである。これを平家物語に照してみると其處が六字河臨となつてゐる。

盛衰記の六字と云ふのは平家の六字河臨を指すと見れば自然盛衰記の訶梨帝も生きて來る道理であるが、六字と云つたのみで將して六字河臨の法を指すかどうかを考へて來ると非常に怪しくなつて來る。六字河臨の法は中臣の祓と佛教と混同したやうな修法で産婦の祈禱と傳へてゐるが、六字法と云へば六觀音所變の六明王を祈る修法(或は文珠の六字真言)で、別種のものである。六字と六字河臨とが別種とすれば盛衰記の訶梨帝はもと河臨の字音が轉訛したものと思得るから、根據が薄くなる次第である。

鬼子母神を産婆にして金儲をして居るのは日蓮宗に限るやうであるが、日蓮宗

の所依の經典たる法華經の陀羅尼品には鬼子母神は十羅刹女と共に法華守護の神として、法華經を讀誦し受持せん者を擁護してその衰患を除かんと欲す、若し法師の短を伺ひ求むる者ありとも便を得ざらしめん」とは誓つてはるるが、産婆となつて安産せしめんとは誓つてはるる。宗門所依の經典の所説を他處にして、祖師が亡國とまで罵つた眞言の經典に順奉し、安産の護符を賣て口腹の量とする罪を自ら願ひてもらひたい。

日蓮の末輩は七面山の龍女の事を記して「その本地は吉祥天女、父の名は圓滿具足天、母の名は鬼子母」などと附會し、十羅刹女を鬼子母の子としてゐる。鬼子母神は先に云つた如く夜叉である。十羅刹女と鬼子母との血縁を説いた記事は見當らない。

聞けば日蓮作と傳ふる鬼子母神は鬼面の立像であるとか。これは十羅刹女の同



日蓮の宗の鬼子母神  
一六〇頁參照

列れつに説とかれた阿含あこん法華ほつげ經きやうにある佛ぶつ法ほふの守しゆ護ご者しゃで、單たん稱しやう日蓮にっれん宗しゆで祈き禱たうを行せうなてゐる、  
印度いんどの俗そく信しん化くわした產さん婆ばではあるまいと思おもふ。

鬼  
子  
母  
神

# 辯才天

一

辯才天は又大辯天、大辯才天、大辯才功德天、辯天とも云ひ、美音天、妙音天とも云ふ、梵名は薩囉薩伐底 Sarasvatī である。

サラスワティーは水多き者の義で、もと北方印度の河名であつたのが、神格化して女神となつたのである。サラスワティー河は今明白に知ることは困難であるが、現今のサルスティー Sarsuti 河だと云ふ説もある。元來河神であるから荒れた田野に肥沃の土壤を堆積し、土地の豊沃・汚染を洗淨する等の點から五穀豊饒、富貴減罪等を功德としたが、後に一轉して言語、智慧の女神ワーチと

結合してからは全然智慧の神と化した。この神格は吠陀時代にはまだ現はれなかつたが、摩迦婆羅多や梵書の時代になつて成立した思想で、もとアリアン人種が北方の山地に居た頃常にこのサラスワティー河の岸で祭壇を築いて祭典を擧げて居る時に、當然この河神を勧請して居たのが、一變して祭式を行ふ度に必ず勧請しなければならぬ神のやうに考へられ、更に神格に變化を生じて祭式に必要な讃歌の製作を守護する神となつたのである。かうなるとサラスワティーは單に河神としてよりも一層哲學的意義を持たグーチの神と同一になつて、その地位は向上し、ブラーナ時代には梵天の妻なる智慧辯才の神、梵語及びデーヴナーガリーの書體の創作者、學業の守護者となり、形相も一定して二臂の天女形で整然たる姿をなし、月の如く艶麗に輝きて蓮華上に坐すとしてゐる。タントラの中にも女神はやはり智慧の神として、火が森を焼く如く女神は人類の邪念を燒盡して

歸依者を歡喜せしめ、無知を破る神、永劫に清淨なる神、智慧の施與者、解脱、幸福の施者、否女神は智慧それ自身、記憶・決斷・意思・及び徳の源泉なりとし、雪白の寶冠を戴き、白色の頸飾を著け、琵琶を彈じて蓮華に坐する形相を擧げてゐる。

女神の像は印度では二臂の時は梵筈と念珠を持ち、四臂の時は次手に網索と鉤とを持ち、又孔雀に乗つた四臂の像は梵杖・梵筈・念珠・水瓶を持てる。その他持物は一定してゐない。

河神が智慧言語の神となつてからは河流の波音はその妙辯となり音楽となつて辯才天妙音天として琵琶を象徴としたもので、ブラーナ時代には神話中にもヴイシヌ梵天等の相手となつて種々な情事も作つてあるが、さのみと思ふから一々は略して置かう。

女神は別名も澤山ある、或はバーラター Bhairavi ブラーフミー Brahmi (梵天妃) プートカーリー Pulkari シャーラダー Sarada ヴーギーシューワリー Vāgīśa 等はそのである。

要するにサラスワティー即ち辯才天は吠陀時代は施福の神、五穀豐熟、清淨の神であつたのが、言語の女神と結合して以來智慧辯才の神となつたのである。

二

辯才天は印度所傳によると智慧辯舌の神である如く、日本でも初めは辯才天と書いて居たが、後に辨財天と書くに至つて施福神となつた。そして施福神となつた後もやはり妙音天辯才天たる象徴の琵琶を手に持ち、河邊に坐せしめたまふであるは面白い現象である。

辯才天は佛教中では元來金光明經の信者の守護神で、その記事も金光明經七以下に出たのが信すべきもので、日本で流布した種々の經典は識者の一顧にも値するものは無い。辯才天品經七下に橋陳如婆羅門が世俗諦の上から天女を讚歎して、辯才天を一に那羅延天と呼び、世界中に自在を得、母となりては世間の一切を産み、又軍神となりて常勝の榮を得ると云つたのは、言語の女神グーチが生主から生れて生主と結婚して一切世間の母となつたと云ふ神話から得た思想であると等しく、或は閻羅之長姉と現じて可畏身を示し、婆蘇天の妹と云ひ、牧牛者の歡喜女等となるとも云ひ、常に洞窟河邊叢林中に居りて諸人の供養をうけ千眼の帝釋王も天女に對しては慇懃にすると述べて、全く印度在來のものと同様に取あつかつて居る。

それであるから自然辯才天品に現はれた天女はその功德は智慧才能が表面にな

つてゐて、金光明最勝王經を説く法師をして智慧を(増)益し、辯舌を莊嚴にせしめ、經中の文言を忘失するを防ぎ、よく開悟せしむと誓ひ、又この經典を聞く有情をして不可思議の捷利辯才と無限の大智慧を得て種々の論議技術に通達せしめ、生死流轉の境界を出て、無上正等覺に趣かしめ、又現世の利益としては壽命を増し、種々の日用品に不自由のない身としてやると云ふのが開卷第一の辯才天の本願である。

辯才天は又辯才天品中に如來の辯舌の徳を讚歎して「如來金口を以て法を演説すればその妙響は諸の人(間)天(人)を調(御降)伏し、舌相縁に隨つて希有を現じ、(舌相)廣長にしてよく三千(世)界を覆ふ。諸佛は皆引願を發すによりてこの舌相の不思議を得」と云ひ、衆生は辯才天を祀ることによつてこの辯才を得と教へ、「若し人最上智を得んと欲せば應に一心にこの法を持すべし、福智(及び)諸の



功德を増長して必ず成就せん、疑を生ずる勿れ」と勸め、「衆生希望する事あらば悉く能く速に成ずるを得しめ、又聰辯を得しめ、聞持を具せしめ、大地中に於て第一者たり、大山の如く、大仙の如く、小女の如く欲を離れ、大世王の如く實を語り、一切の困苦を救ふ」ともある。

同じ金光明經の八卷にも辯才天を説いてゐるが、此處でも又橋陳如婆羅門が對告衆になつて天女を外道的に説いた後、天女の哀感加護を得、現世中に於て無礙の辯、聰明の大智、巧妙の言辭を得、博綜、奇才、論議等意に隨つて成就して疑滯なきを得んとする者は、辯才天を供養せよとの意味が述べてある。

これを要するに辯才天はその名の示す如く、少なくとも漢譯の經文の上では智慧辯舌の神徳が第一義であることは疑を用ひぬ點である。さて辯才智慧のみで福徳の方面は全然現はれてゐないかと云ふに、一概に福德神でないと否定し去り得

ぬ半面もある。

先に出した經のうちにも、現に辯才天の呪文と稱へて藥湯を以て尊像を洗へば天災を除き、運命を開き、病を癒し、戰爭に勝ち、惡夢・鬼神・蠱毒・厭魅を遠ざけ法術を以て自己を呪咀する者、起屍鬼等の障難を滅すとあり、次に「あらゆる患苦盡く消除し貧窮を解脱して財寶足らん」と云ひ、又「もし財を求むる者は多財を得、名を求むる者は名稱を得、出離を求むる者は解脱を得」とさへある。是を以て見るに辯才天は福德の神であることは否定し得ないが、その神徳は天女の第一義の徳で無いこと、辯才天を辨財天と書くことは全然間違であるは確實である。

印度で一時智慧の神となつた辯才天が、佛教へ來て如何にして昔の面影の福德神施福神たる分子を加味したかは一日にして決定し能はぬ問題であつて、或は

辯才天

一チとサラスワティーとが全然同一し得ない時代に佛教に取り入れられたとも見られやうし、又は何の神でも多少徳神として吹張しないと人の歸依を得兼ねるからと云ふ政策上から来たとも曲解は出来る。がサラスワティーが全然グーチとなり終つたのはブラーナとタントラの時代（西洋紀元八百年より千年）であるから前の見方が正しいかも知れぬ。

三

日本で辯才天を祀つたのは何の時代に始まつたかはこれを究めるに由も無いが金光明經はこれを護國の經として可なり古くから大切に取扱はれた歴史を持つて居て、元亨釋書二十二に聖武天皇天平十三年の詔に、諸の國分寺を金光明四天王護國之寺と號し、僧二十人を置いて金光明最勝王經を講讀せしむとある。

當時日本に来て居た金光明經は四卷本と義淨譯の十卷本であるが今最勝王經とあるのは十卷本の稱で、その兩者の中には立派に辯才天を説いた卷がある。その後、傳教大師はこの經と仁王經と法華經との三經を鎮護國家の三部經として、嵯峨天皇弘仁二年以後叡山の法華堂で講讀させたと傳へ、下つては最勝經の講讀は宮中の年中行事となつて、公事根源に五月の吉日を定めて東大・興福・延暦園城の四大寺の知識僧を選んで、最勝王經を清涼殿にて講ぜらるゝなり。この事一條院御宇寛弘の頃よりはじまる。或は長保四年より始まるとも申すなり。後朱雀院の御時にや、生身の四天王道場に現せさせ給ひけるより、必ず四天王の座をしかれ侍るなり」と録し。又一説に鳥羽天皇永久元年七月に白河法皇が鳥羽院で始めて修せられたとも傳へてゐる。（釋家官班記下）

辯才天を説く唯一の經である金光明最勝王經は上述の如く、上は奈良朝

から平安朝にかけて盛に尊信せられて居た。最勝講の存在は永久年間まで降すこととは不可能であると思ふ。その名が榮華物語にも出てゐるから、寛弘か長保の頃の創始が正しいと推斷しなければ不都合を來たすからである。

初め聖武天皇の御推舉をうけ、傳教の國家主義に宣傳せられ、更に一條天皇の頃の皇室の力によつて鼓吹せられた金光明經中に説かれた辯才天は當時どのやうに見られて居たであらうか。さぞ人々の尊敬を受けて種々の靈説を播布して居たことであらうとは誰れしも想到することであるが、不思議なことには靈異記には吉祥天の靈験は出て居るが辯才天に至つてはその名さへ見當らない。今昔物語にさへ辯才天を主とした話説は傳へてゐない。實に不思議である。

然し一方から見るとこれも尤な譯で、當時金光明經を護國の經として居た理由は、公事根源に消息を傳へる如く、その信仰は四天王、殊に毘沙門天にあつ

たものである。辯才天の功德は毘沙門天に蓋はれて現はれ得る餘地が無かつたのである。

これを要するに辯才天の信仰は平安朝時代にはまだ流布して居なかつたと云ふ結論に達し得たのである。

さて稻荷の節でも一寸云つたやうに、盛衰記には清盛の榮達を妙音辯才を祀り茶枳尼の法に歸依したことに歸し、辯才天と茶枳尼天とを混一したやうな記事を載せ、單に財福神の辯才天とし、外道の祀る神として良心に咎められた形式で崇拜して居るが、更に降つて太平記に至つては全然今日の辯才天の面影を現はして居る。即ち太平記五に北條氏の運命を豫定の事實であつたと解釋して、その祖時政が「榎島に參籠して子孫の繁昌を祈りけり。三七日に當りける夜、赤き袴に柳裏の衣着たる女房の、端嚴美麗なるが、忽然として時政が前に來て告げて曰く、

汝が前生は箱根法師なり、六十六部の法華經を書寫して、六十六箇國の靈地に奉納したりし善根に依りて、再び此土に生るる事を得たり。されば子孫永く日本の主となりて、榮華を誇るべし。但其舉動違ふ所あらば七代を過ぐべからず略と云ひ捨て、歸り給ふ。其姿を見れば、さしも殿しかりつる女房、忽に伏長二十丈ばかりの大蛇となりて、海中に入りけり。その大蛇の跡に落ちて居た三枚の鱗を取て三鱗形を北條氏の紋とした。北條氏が七代の間天下の政權を執つたのは「覆島の辯才天の御利生、又は過去の善因」の致す所であると云ふ。

平家物語七竹生島詣の事には辯才天を本地法身の如來に廻入してその功德を衆生濟度とし、未だ龍神施福神とはして居ない點から考へて、辯才天を財福の神、蛇神として俗間の欲深連中を迷はし始めたのは恐らくは足利時代以後のことではあるまいかと推定ができる。



天才辯く説に經偽  
照參頁五七一